
失われた勇気の紋章

えーさん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

失われた勇気の紋章

【Nコード】

N3694P

【作者名】

えーさん

【あらすじ】

あの夏から25年……

ある日、帰宅途中の八神太一とアグモンが現実世界から忽然と姿を消した。

「世界を救う」

とだけ言い残し。

その知らせを聞いた7人は、太一を探すために再び集結する。

皆大人になり、多方面で活躍する面々。

しかし、幼かった頃のように共に泣き笑った時の絆は徐々に消えつつあった。

太一はどこへ消えたのか。

そして「世界を救う」言葉の真相は――。

彼らは再び戦いの渦に巻き込まれようとしていた。

動き出す時（前書き）

この小説は素人の完全妄想二次創作作品です。それを御理解の上、ご覧ください。

動き出す時

あの戦いから25年・・・

2024. 07. 25

―――8月1日まであと7日。

「父さん、父さん。お仕事の時間だよ。」

「う・・・あ・・・あっ！も、もうこんな時間!？」

ベッドから慌てて飛び出し洗面所へ向かう。そしてガシガシと手荒に顔を洗い、歯磨き粉を撒き散らしながら歯を磨く。

（俺っていくつになっても変わらないなあ・・・。）

俺の名前は八神太一。年齢は39歳・・・もうアラフォーと呼ばれる世代だ。仕事は外交官。と言っても、人間界ではない。デジモンワールドと現実世界を繋ぐ、いわゆるデジモン外交官（通称Dd）だ。子供は1人いる。

「父さん？急がないと会社遅刻するよって母さんが・・・。」

心配そうに俺のあとをついて回るこの子は優佑^{ゆうすけ}。小学3年生の元気一杯な男の子だ。俺とそっくりでサッカーが得意。今はまだまだ下

手くそだが、将来のエースストライカーに絶対なるだろうと期待している。つまり俺は立派な親バカだ。

「太一いゝ、まだなの？ 僕もう準備出来てるよ。」

そう言って洗面所を覗き込んだのは黄色い恐竜。そう、あの夏に出会った大切なパートナーデジモンのアグモンだ。

「すまないアグモン。急いで支度するよ。」

ヒラヒラとアグモンに手を適当に振り返す。

「もゝ。玄関で待ってるよ。」

相変わらずな奴だと言わんばかりの表情でアグモンは玄関に向かった。情けない話だが、社会人になってアグモンより先に支度ができた事は一度もない。案外あいつはしっかりしているんだ。

「ああ、すぐ行く。」

鏡を見ながらネクタイを慣れた手つきで締める。中学に上がったばかりの頃は、上手くネクタイを締めることができずに“ネクタイなんてめんどくせえ。”なんて思っていたけど、時が経つのは早いものだ。今は1分も経たずに締められるし、スーツもなかなか様になっている。

「そりゃそうだよな。いい親父がなに言ってたんだか。」

フフ・・・とい声に出して苦笑いしてしまった。

「太一い、早く。」

しびれを切らしたアグモンの声に急かされてハツとする。バタバタと階段を駆け降りて玄関へ向かう。今日も朝ごはんを食べられそうになさそうだ。

玄関で靴を履いているとニコニコしながら優佑が近づいてくる。小学生は夏休みだから、この時期は毎日のように俺の事を玄関先まで見送ってくれる。

「ねえ、父さん。あと一週間で8月1日だよ。楽しみだね！」

そうか、もうこんな時期か。1999年8月1日・・・あれからどれくらの時間が経ったのだろう。あと一週間で毎年恒例のあの日が出てくる。みんな元気にしているだろうか。

懐かしみながらクシャツと優佑の髪をなでる。

「ああ、そうだな。でも優佑、ちゃんとして宿題しないと連れていけないからな。」

「ええ・・・。」

優佑はバツの悪い顔をした。さすが俺のDNAを引き継いだ子供だ。きつとまだ全く宿題に手をつけていないのだろう。小学3年生でこれって大丈夫なのか？とも思ったが、まあいっか。

「ほーら、お父さんはお仕事行くんだからここまでよ。帰ってきたらまたお話しでしょ。」

優佑の後ろから少し背の低めの、優しく笑いかける女性が話しかける。彼女の名前は夏希。俺の奥さんだ。夏希はヒカリと同級生で、たまたま家に遊びに来たのがきっかけで知り合った。その優しい表情とは裏腹に、結構肝の座った頼りになる女性だ。絶対に彼女を怒らせてはならないと俺の本能は叫ぶ。

「それじゃ、行ってきます。」

「行ってらっしゃい！」

二人に見送られてアグモンと家を出た。

外に出ると既に夏の陽射しがジリジリと迫っていた。今年の夏は異常気象で、朝から30度近い気温を記録していた。世間はクールビズだと言うのに、今日は朝から会議でネクタイと上着の着用は必須。蒸せる程の暑さに体が溶けてしまいそうだ。公務員も楽ではない。

「あ、太一！あれを見て！」

いきなりアグモンが大きな声をあげた。

「んー、なんだアグモンいきなり大きな声を出すなよ。どこだ？」

あそこ！とアグモンが指差す先には、空が覆い尽くされる程の無数の黒いアゲハチョウが舞っていた。

「なん・・・なんだあれは。気味が悪いな。」

体にゾクツと寒気が走った。今までこんな光景を目にした事なんてなかったからだ。あんな蝶の大群聞いた事なければ、見た事もない。何だか胸騒ぎがする。

太一は不気味な光景に冷や汗をかいていた。汗をぬぐおうと不意に左手にした時計に目をやると

「わ、やばい！こんな時間だ！おい、アグモン急ぐぞ！」

既に遅刻寸前の時間に、蝶の大群に気を取られているアグモンの腕を無理やり引っ張り慌てて駅まで走る。あの大群は気になるが、今はそれどころじゃないんだ。このままでは会議に遅刻してしまう。

「とりあえず先を急ぐぞ！」

しかし、あんな事になってしまうなんて・・・この時はまだ知る由もなかったのだ。

今日も会議室ではいつもと同じ話題について触れた。

「人間がデジタルワールドの混乱を招いている。このままではデジタルワールドはいつか滅びてしまう」

という内容だ。

年間何万人もの人間がデジタルワールドへ足を踏み入れ、希少価値の高いデジモンを密輸したり、データの書き換えを行いフィールドを意のままに操っているというデータが出ている。デジタルワールドの平和や秩序が、人間たちの手で崩れようとしていた。

会議で毎日のように人間がデジタルワールドで好き勝手やっているという情報を耳にしている太一とアグモン。

人間とデジモンが平等という立場に立てなくなり人間が主体でデジモン達に悪影響を及ぼしている現状に、その日の帰りも太一は憤りを感じずにはいられなかった。

（どうして人間はデジモンを自分達の道具のように利用しているんだ。デジモンは物じゃない、大切なパートナーなのに。）

太一の中には毎日人間がデジモンに対する行為への怒りが、日に日に増していくのであった。

そこに、今朝見た黒い蝶が一羽舞い降りてきてこう言った。

「タスケテ、タスケテ。コノ世界ヲスクエルノハアナナタチダケ。」

どこからともなく女性のような声が聞こえた。しかし周りを見渡しても誰も俺達に方を見ていないし、それらしき人物は1人も見当たらない。もしかして・・・

「な、なんだ？ 蝶が喋っているのか？」

目の前に舞っている蝶に近づく。

「太一、この蝶とても苦しそうだよ。」

アグモンは蝶の気持ちでもわかるのだろうか、苦しそうにしていると俺に訴えてきた。

「大丈夫か・・・？」

太一が黒い蝶をそっと手のひらで受け止める。

その瞬間、黒い蝶がビッシリと舞い太一とアグモンを包み込む。まるで夜の闇に引きずり込まれたかのように、あたり一面が漆黒の闇と化した。

（なにも見えない。ここはどこなんだ。）

アグモンの姿も、周りにいたハズの人影も見えない。自分の姿さえも。

「アグモン！ どこだー！」

大きな声で叫ぶ。すると姿は見えないが確かに前方から

「太一！ ここだよ！ 僕はここにいるよ！」

とアグモンの声が聞こえた。

「アグモン、これは一体何なんだ。一面暗闇で何も見えないぞ。」

ベビーフレイムでアグモンが明りを灯してくれている。なんとか手探りでアグモンの隣まで近くことができた。

「僕にもわからないよ。ただ、なんだかすごく嫌な感じがすることは確かだよ。」

ブルブルとアグモンは体を震わせた。周りは真っ暗で何も見えない。音も自分とアグモンの声以外はなにも聞こえない。まるで別の世界に来てしまったようで、ただ茫然と立ち尽くすしかなかった。

「ちくしょう、一体何だってんだよ。」

このどうしようも出来ない空間に苛立ちを感じ口調をきつくする太一。

（——突然こんな事をしてしまってごめんなさい。）

またさっきと同じ声だ。一体どこから聞こえているのだろうか。

「誰なんだ!」

声に向かって太一は叫んだ。

（私です。）

すると声と同時にさっき見た黒い蝶が不気味な光を帯びて太一とアグモンの前に現れた。

「何故俺たちはここにいるんだ。」

蝶に問いかける太一。完全に異なる空間に閉じ込められているのに驚くほど冷静だった。

（あなたは選ばれたのです。お二方をお呼びしたのは他でもありません。あなた達にデジタルワールドを救ってほしいのです。）

デジタルワールド？この蝶はデジモンなのか？太一はふとそう思った。

蝶は続ける。

（かつてあなた方はこの世界を破滅の危機から救い出してくれました。あれから25年。現実世界とデジタルワールドへの行き来ができるようになり、人間がこちらの世界へ訪れるようになってから好き勝手ばかりしています。）

太一とアグモンは目を伏せた。

蝶の言っている事は何一つ間違っていない。むしろ自分達も同じ事を考えていたのだから何も異議を唱える事などないのだ。

（そして今、デジタルワールドは再び破滅への危機を迎えています。デジモン達は人間達が作り上げた共存という名の支配の下に、消滅しつつあります。）

「何だって！？そんな事は絶対にさせてはならない！」

太一は声を荒げて蝶に言った。

（その通りです。ですからあなた達をここへ呼びました。）

「俺達にできる事があるなら何だって言ってくれ！全力で力になるよ！なあ？アグモン。」

「ああ、そうだね太一。蝶さん、僕達は君の力になりたい。どうすればいいだい？」

二人とも人一倍正義感が強く、その答えを出すまでにはそう時間はかからなかった。

（ありがとう二人とも。あなた達にはかつての様に、紋章やデジヴァイスの力を使い人間たちを排除してほしいのです。）

「デジタルワールドから悪い人間達を現実世界へ追い出すって事か？・・・でも、今の俺には紋章もデジヴァイスもないんだ。すまない。」

力になると言ってみたものの、過去のようにアグモンを進化させられるような力は太一にはもうなかった。自分の不甲斐なさに悔しい思いを隠しきれず、太一は拳を握りしめた。

（心配いりません。これを――。）

「これは、そんな馬鹿な・・・・・・。」

その時太一の目の前に現れたのはデジヴァイスと勇気の紋章。勇気の紋章は過去の戦いで破壊されたハズなのに何故――。しかも依然と違って色が少し黒いような気がする。

（それはあなた達二人のデジヴァイスと紋章です。ある方が特別に復活させてくださいました。さあ、それを手にとってください。）

太一の手のひらにじんわりと汗がにじむ。スウーッと息を吐き、おそるおそるデジヴァイスへと手を伸ばす。キュツとデジヴァイスを握った瞬間、もの凄い力が太一とアグモンに注ぎ込まれる。

「うああああ！す、すごい。なんて力なんだ！」

「太一！僕、体中に力がみなぎってくるよ！」

眩い光が二人を包み込む。地面から突き上げるようなもの凄いパワーを感じる。

ああ、確かに凄い力だ。アグモンと出会った夏の時の様に何も恐れず突き進めるような、今ならなんだって出来る気がする。太一は自分の内側から溢れ出る力を全身で感じた。

「――いち、太一！」

アグモンに名前を呼ばれ我に返る。

「太一、体が……。」

「え？」

アグモンの驚いた顔を見て自分の体をよく見てみる。なんだこれは。

細い足に細い腕。身長もアグモンとグツと近く感じるくらい低く感じる。これじゃまるで……

「子供じゃないか！」

声も高くなっている。何もかもあの夏に戻ったみたいにな。どうなっているんだ。

（そう、その姿があなた達二人の力を最大限に発揮できます。取り戻したくはありませんか？あの頃の輝やいていたデジタルワールドを。今の腐れきった人間達の手からあなた達二人の力で。）

太一とアグモンの核心に迫るように蝶は問いかけた。ドクン・ドクン……と心臓が脈打つにつれ、心が闇に支配されていく。

「取り……戻したい……。あの頃の世界を……………」

「僕達の……デジタルワールドを救わなくちゃ……………」

二人の心は完全に闇に支配され瞳からは輝きが失われた。その二人の姿を見て、今までとははるかに違う口調で蝶は言った。

（コノ世界ヲ救エルノハ、キミタチダケデス。サア、忌ワシキ人間ドモヲ排除シ、取り戻スノデス。アノ時ノデジタルワールドヲ。）

「この世界を救う為に、人間を排除する。邪魔する奴は誰であろうと倒す——。」

マインドコントロールされたように、太一とアグモンは繰り返しつぶやいた。

（ソウ、ソレデ良イノデス。サア、行クノデス。）

蝶は満足そうに二人に言う。すると彼らの後方に一つの扉が姿を見せた。

太一とアグモンは恐ろしいほどのパワーを手に入れ、体は黒い邪悪なオーラに包まれていた。二人は後ろを振り返り扉を開けた。

「行くぞアグモン。」

「ああ。」

ボタン。扉が閉まり二人はデジタルワールドへ姿を消した。

（ククク。サア、残りノ選バレシ子供達ヨ、ドースル？八神太一ガ相手デハ手モ足モ出マイ。楽シイゲームノ時間ノ始マリダヨ。）

蝶がそう言い放つとピカッと辺りは光に包まれ、元の町並みへと戻った。無数の蝶も跡形もなくなくなっていた。そして、太一とアグモンの姿も。

その日の夜、優佑は帰りの遅い父を心配していた。

「母さん、父さん遅いね。まだ帰ってこないのかな？」

夏希もまた、帰りの遅い二人を心配していた。

「きつとお仕事が忙しいのよ。ほら、もう夜遅いから優佑は寝なさい。」

「うん、おやすみ。」

優佑は夏希に促され自分の部屋へ向かう。明らかにいつもとは違う何かに、夏希はモヤモヤと嫌な予感を感じていた。

（会社にもいないし携帯も繋がらない。どうしてしまったのあなた・・。）

その日太一とアグモンが家に帰る事はなかった。

——八神太一失踪1日目の出来事であった。

再会

翌日、夏希は行方不明の太一とアグモンが心配になりある人物へ連絡を取った。

プルルルル・・・

呼び出し音が鳴り、もしもと相手が出た。

「あ、ヒカリ？夏希だけど」

電話の相手は藤崎ヒカリという女性。そう、彼女は夏希の高校の同級生であり親友でありそして太一の妹だ。現在は結婚して八神から藤崎へと名字が変わっている。

突然の電話にヒカリは驚いた。

「夏希？久しぶりね！元気してる？」

当たり障りのない返答を夏希にする。

「あ、ううん。ちょっとね。」

受話器越しのいつもとは違う元氣のない声にヒカリは何か様子が変だと敏感に反応した。彼女は人の心の変化に関しては人一倍感受性が高い。

「どうしたの？お兄ちゃんとかあった？」

さすがヒカリだと夏希は思った。そして昨日から太一と連絡が取れ

ない事、モヤモヤと変な胸騒ぎがする事を伝えた。

「そう・・・お兄ちゃんが。確かに何か変ね。だって、お兄ちゃんが連絡もなしにいなくなったりする事なんて絶対じゃないもの。」

太一に関してはヒカリはエキスパートだ。兄が勝手にどこかに消えたり、人に心配をかけるような人ではないと分かっている。何かあると直感で感じた。

「夏希、とりあえず私からもお兄ちゃんへ連絡をとってみるわ。あと、ヤマトさん達にも連絡をとってみるね。」

ヒカリは不安そうにしている夏希を落ち着かせる為に、優しい口調で話しをして電話を切った。そして、急いで他の6人の選ばれし子供達に連絡を取った。

「え？太一が？」

ヒカリがまず先に電話をかけたのは空のもとだった。ヤマトは仕事で、家にいた空が電話に出た。

「そうなんです。お兄ちゃん、昨日から行方不明みたいで。空さん何か知りませんか？」

「いいえ、何も知らないわ。」

溜め息交じりに空は答えた。

「そう・・・ですか。」

やっぱり空さん達も知らなかったんだと肩を落とすヒカリ。それを感じてか、先輩としての落ち着きなのかわからないがこうヒカリに言った。

「ヒカリちゃん、心配いらないわ。太一ならきっと大丈夫。私達も力になるから一緒に探しましょう、ね？」

あの夏もそうだった。いつも空はみんなを励まし優しく包み込んでくれていら。空が言うところ、他愛のない言葉でも全て力強く感じるのである。

「ありがとう空さん。あ、ヤマトさんにも宜しくとお伝えください。それじゃ私は光子郎さん達に連絡するのでこれで。」

それじゃまたあとでと空は言って電話を切った。

「太一さんがいなくなっただけですか？」

次にヒカリは光子郎の研究所へと電話をした。たまたまお昼休み中だったので電話を取り次いでもらえたのだ。

「はい・・・。光子郎さん、何か心当たりはありませんか？」

「いえ、特に何も・・・。」

光子郎も何も知らないと言った感じでヒカリに返事をした。

「そうですよね。わかりました、また何かあったら連絡ください。」

そう言ってヒカリが受話器を置こうとした時、光子郎があることを思い出そう言った。

「あ、待ってくださいヒカリさん。太一さんがなくなったのは昨日からですよ？もしかしたら・・・」

何か思い当たる節がある光子郎。続けてこう話した。

「実は昨日の晩にデジタルワールド内のいくつかの地点から、おかしな電波をキャッチしているんです。何か太一さんと関係があるかもしれません。」

本当は太一と何ら関係のない情報かもしれないが、光子郎はデジタルワールドの研究を進めて早十数年。こんなことは今まで一度もなかったのだと言う。

「光子郎さんその電波についてももう少し調べていただけませんか？もしかしたらお兄ちゃんを見つける手掛かりになるのかも。」

わずかな期待ながら、ヒカリは光子郎に調査を依頼した。光子郎も快くそれを引き受ける。

「ええ、わかりました。僕の方で調査を続けてみます。何かあったら連絡しますね。」

「ありがとうございます。それじゃ。」

ヒカリはその後もミミやタケルに電話を掛け、太一が行方不明な
で探すのを手伝ってほしいと伝えた。そして、最後の丈に連絡をし
た。

丈は現在デジモンの医師として活躍している。8人の中では一番デ
ジタルワールドへ出向く機会が多い人物だ。今日もどうやら問診の
為、デジタルワールドへいるらしい。

デジタルワールドへはIP電話の回線を使って、テレビ電話でリア
ルタイムで連絡を取り合うことが可能である。

ヒカリは携帯を取り出し、丈の携帯へテレビ電話をかけた。プルル
ル……呼び出し音を鳴らす。

「はい、もしもし?」

丈とゴマモンの姿が携帯の画面に映し出された。

「丈さん、ゴマモン。お久しぶりです。ヒカリです。あ、今大丈夫
ですか?」

ヒカリは画面越しに丈とゴマモンに話しかける。

「ヒカリ! 久しぶり!」

明るい声でゴマモンが挨拶をした。

「ああ、大丈夫だよ。太一の事かい?」

丈はヒカリにそう答えた。まだ太一が行方不明になった事は言っ
ていないのに、どうやら既に事情は知っていたようだ。

「え、あ、そうです。もう知っていたんですね。何か御存知じゃな

いですか？」

ヒカリは他のメンバーと同様の質問を丈にもした。丈はいつもよりも暗い面持ちで話し始めた

「その事なんだけどね、光子郎から連絡があって僕もついさっき知ったばかりなんだ。」

そうか、丈さんも知らなかったんだ。ということはあまりお兄ちゃんの事知らないかもしれない。そうヒカリは悟った。しかし、次の瞬間丈から思わぬ答えが返ってきた。

「ヒカリちゃん、太一と関係があるかわからないのだけど、昨日の夜からデジタルワールドで人間の負傷者が急増しているんだ。でも、デジモンに危害はないみだいで・・・」

丈の話によると、昨晚からデジタルワールドにいる人間が大けがを負い助けを求めてくる者が急に増えたらしいのだ。しかも負傷者のデジモンは全て無傷。

人間が怪我で動けない状態なので、丈の元へデジモンが次々と大慌てで駆け込んきたそうだ。そして、デジモン達は口ぐちにこう言った

“ 黒い影が人間を襲った ”

と。黒い影の正体が一体何ものなのかは不明だが、黒い影は凄まじいパワーで恐怖に足がすくみ動けなかったとデジモン達は丈に告げた。

「ひどい、一体その黒い影は何なんですか？」

ヒカリは青ざめた顔で丈に問いかけた。丈は眼をつぶり、首を横に振った

「わからない。まだ全然情報が少なすぎて。ただ、太一がこちらに来ていたとしたら、この黒い影に襲われないと良いのだけど。」

その言葉はヒカリの不安を煽った。

「そんな・・・、お兄ちゃん。」

携帯をきつく握りしめ、今にも泣きそうな顔でヒカリはつぶやいた。丈は年長者らしく励ますようにヒカリに話しかける。

「大丈夫だよヒカリちゃん！太一には僕らがついてるんだ！絶対に見つかるって。」

丈は先ほどの真剣な顔とは打って変わって、満面の笑みでヒカリを励ました。その様子を見て、ヒカリはキリッと表情を変える

「そうですよね。私達がしっかりしないと。お兄ちゃん必ず見つけ出すから待っててね。」

その意気だよ！と丈はヒカリを励まし続けた。するとその時、丈の後ろでゴマモンが危ない！と叫び電話の画像が乱れた。

「うあああああ！」

丈の叫び声と共に画面が真っ暗になる。

「丈さん！丈さん！どうしたんですか！？」

ヒカリの問いかけにも応答がなく画面が乱れたままだ。ヒカリは必死に丈の名を呼び続ける。

「丈さん大丈夫ですか！？ お願いです、返事をしてください！」

すると、画面の映像が元に戻った。しかしそこには意識を失い倒れている丈の姿と、画面の奥の何かを呆然と見つめるゴマモンの姿が映っていた。

「ゴマモン！ 一体何があったの！？」

ゴマモンはこちらに気づき答えた。

「ヒカリ・・・、黒い影だ。目の前に黒い影、いや、丈を襲ったデジモンがいる。」

やはりこの騒ぎの犯人はデジモンだったんだ。ヒカリは冷静にすぐにゴマモンに指示を出した。

「ゴマモン、携帯のカメラを犯人の方向へ向けて。」

だがゴマモンはヒカリの意に反し、その指示に躊躇しているようだった。どうしたというのだろうか。

「良いのかヒカリ。デジモンだけじゃない、人間も一緒にいるみたいけど。」

ゴマモンの言った言葉がヒカリには、何故躊躇する理由になるのか意味がわからなかった。構わないとゴマモンにカメラを向けさせた。

ゴマモンが敵に携帯のカメラを向けた瞬間、ヒカリは絶句した。

「あれは、そ、そんな……。」

言葉を失うヒカリ。それに代わってゴマモンが言う。

「ああ、あれは間違いない。ウォーグレイモンだ。」

カメラの先にははっきりと、砂煙にまかれ体の色が黒いウォーグレイモンが立っていた。さらにウォーグレイモンの手前に何者かがいるように見える。

その姿は背が低く、子供のように見えた。ゴーグル、グローブ、髪型……どこかで見覚えのある姿だ。視界がクリアになるにつれて人物がはっきり見えるようになってきた時、ヒカリとゴマモンはある人物の名を呼んだ。

「お兄ちゃん（太一）？」

二人が声を揃えて言う。そう、ウォーグレイモンの手前に立っている人物は小学生の頃の八神太一そっくりの少年だ。ヒカリは直感で間違いなく兄だと感じ息を飲む。

「太一なのか？」

誰に聞くわけでもなくゴマモンがつぶやく。

その声に少年は少し反応したように思えたが、こちらに近づこうとはせずウォーグレイモンの飛び乗った。

「待って！」

ヒカリが電話越しに少年を呼びとめようとしたが、黒い幕が二人を包み彼らは姿を消した。

丈はその後、デジタルワールドの監視中に異変に気付いた光子郎が駆け付け、すぐに病院に運ばれた。幸い軽傷程度で命に別条はなく、その夜丈の病室へ選ばれし子供達が集まりヒカリが事情を説明した。皆最初はヒカリの話を半信半疑で聞いていたが、ゴモンの証言や偶然携帯に録画されていた映像を見てそれが確信へと変わった。全員動揺を隠しきれない様子だ。

「本人かどうかは別として、太一とアグモンの身に何か起こっていることは間違いなさそうだな。」

そう言って沈黙を破ったのはヤマトだった。

「ええ、今も太一さんと連絡は取れていませんしきっとそうでしょうね。」

光子郎もヤマトと意見と同じことを思っていたと、険しい表情で答えた。

すると光子郎の隣にいたミミが口を開いた。

「私は太一さんでないと信じているわ。でも、もし仮にそうだとしなくても私は闘えない。」

ミミが言わなくともここにいる全員がそう思っているはずだ。皆下を向き再び沈黙が続いた。

「でも、このままでは良くないよ。これ以上犠牲者が出ないように僕らが止めないと。」

うつむいている皆を見て、少年を止めることができるのは僕達しかない」とタケルが言い放った。

「そうね、ここでウジウジしててもしょうがないわ。」

タケルの言葉に追い風を吹かせるように、空が賛同した。

全員がああ、そうだと口々に発し、最後まで悩んでいたミミも太一の為に闘うと決意をする。その後も話し合いは続き、明日から全員で太一の搜索をする事が決まった。

「じゃあ、光子郎はデジタルワールドの監視を引き続き頼む。俺とタケルは明日からデジタルワールドへ行き太一を探す。空、ミミちゃん、ヒカリちゃんはこちらの世界で情報を集めてくれ。丈は傷が回復し次第俺たちと合流。とりあえずはこの作戦で行こう。」

かつて太一が皆をまとめていたように、不在の太一に代わってヤマトが指揮をとる。“了解！”と全員が頷き、明日からの太一搜索に備え家路についた。

ライバルであり一番の親友でもある太一の事を誰よりも心配しているヤマト。

——太一、待ってろよ。必ず見つけ出してやるからな。

夜空に向かってそう誓い、彼は眠りについた。

光と影

3日目の朝からそれぞれが太一の搜索を開始した。

ヤマトとガブモン、タケルとパタモンデジタルワールドへ向かった。

「何年ぶりだろうな、ここへ来るのは。」

四人が到着して周りを見渡しながら、ヤマトがまず一言目を発した。

「兄さんはデジタルワールド以外にも宇宙に行ったりしていたからね。僕は年に1度くらいだけ来ていたよ。兄さんみたいに3つの世界を行き来するようになったら、体が1つじゃ足りないだろうね。」

皮肉混じりにタケルが笑いながらヤマトに話しかける。

「あのなあ、俺だってデジタルワールドがどうでも良いなんて思っていないんだぞ。ただ、太一、光子郎、丈、タケル、みんながいてくれたから、いろいろな事を任せっきりにしてしまっただけかもしれない。」

すまないと申し訳なさそうにヤマトはタケル言い、タケルはそんなことないよと返した。

「さ、冗談はこころへんにして太一を探すぞ。」

和やかな雰囲気から一変、気持ちを切り替えるヤマト。しかし、探すと言ってはみたもののこの莫大に広がるデジタルワールドで太一

を見つけるなんて雲を掴むような話だ。

「どうするかなあ。」

ヤマトがフウッと溜め息をつきながらぼやくと

「兄さん、とりあえず二手に別れよう。きっとその方が早く手掛かりをつかめると思うんだ。」

とタケルが提案をした。確かに二手に別れた方が早いかもしれないが、万が一ウォーグレイモンが目の前に現れた時にタケルとパタモンだけで大丈夫だろうか。

きつと考えている事が表情に出ていたのだろう、タケルが察してヤマトを説得した。

「大丈夫だって。兄さんは本当に心配性だなあ。僕もいい大人だよ？ 昔みたいに無茶はしないさ。」

そう話す弟の横顔は、昔とは違いすっかり頼もしいものになっていた。それと引き換えに、それほど月日は流れたのだとヤマトは実感した。

「あ、ああ。そうだな。すまん、俺はいつも過保護だよな。パタモン、タケルを頼んだぞ。」

すまんと言いながらパタモンにタケルの見張りを頼むところがヤマトらしい。心配性の兄はいつまでも健在だ。

「うん、タケルの事は僕に任せて！」

僕に任せておけば安心だとパタモンは耳でパタパタを空を仰いだ。

「だからあ、僕はもうそんな子供じゃないんだって。兄さん達も気をつけてね。それじゃまた後で連絡するよ。」

あまりにも子供扱いを受けたタケルは居心地が悪くなり、ヤマトに背を向けスタスタと歩き出した。その後をパタモンが急いで追う。

「ああ、気をつけろよ！」

そう言ってヤマトはタケル達の背中を見送った。

「ヤマトは本当に心配性なんだから。少しはタケルの事を認めてあげなよ。」

やり取りをずっと見ていたガブモンが呆れながらヤマトに言い放った。

「そ、そうだが、心配なもんは心配だ！」

ヤマトはガブモンに言われた一言に恥ずかしくなり、上を向いてむすつとした態度を取る。自分でも驚くほどタケルの事になると心配で心配で仕方ないのだ。ガブモンは”やれやれ”と首を横に振った。

「よし、俺達も行くか。」

「うん。」

ヤマトとガブモンも太一を探しに歩き出した。

二人が歩き出して2時間くらい経った頃、ヤマトの携帯のメールの受信音が鳴った。送信相手は光子郎だ。現実世界でこの世界の監視を続ける光子郎は、デジタルワールドでの変化をリアルタイムで全員にメールで送信しているのだ。

光子郎からのメールは

”ヤマトさん達がいるエリアの近くに電磁波が出ています。気を付けてください”

といった内容だった。何かがくるのか？二人は警戒しながら先へ進む。

すると突然目の前が暗くなり、声が聞こえた。

（——オ前達ガ、私達ノ居場所ヲ奪ツタ。許サナイ。私達ガ犠牲者ダ。）

「誰だ！どこにいる！？」

ヤマトが辺り一体に聞こえるように大声で問いかける。

（勇気ガ闇ニ染マル時、私達ハ手ニ入レル。本物ノ自由ヲ。）

その声を最後に何も聞こえなくなり、辺りが元の風景に戻った。

「ヤマト、今のって。」

ガブモンが何か言いたげにヤマトに話しかける。

「ああ、間違いない。勇気が闇に染まる時、つまり太一の事だ。何者かが太一を陥れようとしている。」

険しい表情でガブモンの問いに答えた。

「急ぐぞ、太一が危ない。手遅れになる前に何としても見つけ出すんだ！」

二人は時間がないと悟り、急ぎ足で搜索を再開した。

一方その頃、タケルとパタモンはある町へ来ていた。昔一度来たことのある町だ。

「うーん、誰かしらいると思ったんだけどなあ。」

困ったようにつぶやくタケル。すると町一帯を偵察していたパタモンが帰ってきた。

「タケル！あっちの方にいたよ！」

パタモンが何かがいたと思われる方向へ指をさし、二人はその方向へ向かった。向かった先にはアンドロモンとヌメモンが待っていた。

「やあ、みんな。久しぶりだね。」

タケルはアンドロモン達に声をかける。その声に気づいた彼らはあつという間にタケルとパタモンを取り囲むようにして集まった。

「タケル君、パタモン久しぶりだな。」

アンドロモンは思わぬ来客に喜んで二人の手を取った。しかし、目に映る二人の表情は硬く曇った面持ちであった。

「こんな所へ来るなんて、何かあったのか？」

悟ったように二人を問いたです。

「ああ、実は・・・」

とタケルはその場にいる全員に事情を説明した。すると一匹のヌメモンからこんな目撃情報があがった。

「確かほんの数時間前だ。間違いない、子供の頃の太一と黒いウォーグレイモンが向こうの方角へ飛んで行くのを見たよ。」

ヌメモンは二人が飛んで言った方角を見つめながら話した。

「それはきつとブラックウォーグレイモンだ。」

アンドロモンが口を開いた。

「ブラックウォーグレイモン・・・まさか、だってあれはダークタワーの作りだしたデジモンだったはずじゃないか。」

一度は倒したデジモンの復活にタケルは動揺を隠しきれずにいた。アンドロモンは詳細を話す。

「私達デジモンは、大きく二つの属性に分かれているのは知ってい

るな？この世のデジモンにはワクチンとウィルスの二種類が存在する。太一のウォーグレイモンはどちらの属性だ？」

アンドロモンはタケルに問題を出した。

「ウォーグレイモンはワクチンだ。」

タケルの答えに、正解だとアンドロモンは頷き話を続けた。

「その通りだ。しかし、ブラックウォーグレイモンは違う。闇の力を原動力にしている凶悪なウィルス型デジモンだ。太一のウォーグレイモンだとしたらそんなこと有りえないだろう。」

それでもタケルは腑に落ちずにいた。昔進化の過程を誤りスカルグレイモンに進化した事はあったものの、今回は究極体にまで進化している。過程は間違っていないということではないのか？

いろいろな情報がタケルの頭を錯綜し、自分でもわけがわからなくなっていた。

「でも、現に今回は太一さんのパートナーデジモンとしてブラックウォーグレイモンが存在しているんだ。これはどういうことなんだろう？」

アンドロモンに疑問を投げかけた。

「私にもわからない。しかし、仮にそうだとするとパートナーである太一の身に何か邪悪な力が存在し、それがブラックウォーグレイモンの力になっているんじゃないだろうか。」

アンドロモンの返答に思わず息を飲むタケル。だが、だとすれば全

ての話に筋は通るのだ。今わかる一番有力な考え方かもしれない。タケルは受け入れたくない現実には直面し戸惑っていた。するとその様子に見かねたパタモンが

「大丈夫だよタケル。僕達ならきつと大丈夫さ。」

と笑顔でタケルの元へ近づいてきた。その言葉に根拠などない。しかし、その表情はしっかりとタケルの目を見つめタケルの不安を一気に拭い去っていった。

「そうだ、僕達の紋章は希望。いつだって希望を捨てずに、ほんの小さな可能性も無駄にはしてこなかった。太一さんとアグモンを救えるのは僕達、あの頃の選ばれし子供達だけなんだ。」

自分達がここで弱音を吐いていても仕方ないと覚悟を決めたタケルは、ありがとうとパタモンに礼を言った。

「では、君達はこれからどうするんだ？」

決意表明を聞くかのようにアンドロモンは二人に問いかけた。

「もちろん、僕達は二人を救い出しに行くよ。たとえ危険だとわかっていても。」

タケルとパタモンは力強く、そしてはっきりアンドロモンにそう答えた。

「そうか、行くんだな。わかった。月並みな言い方しかできないが、くれぐれも気をつけてくれ。」

二人の断固たる決意を聞き、アンドロモンとヌメモンは町の出口まで彼らを見送りに向かった。

「すまないが、ここから先へ私達がついて行くことはできない。ここでさよならだ。」

申し訳ないとアンドロモンは言った。

「大丈夫さ。見送りまでしてくれてありがとう。それじゃ、みんなも気をつけて。」

タケルは片手をあげてアンドロモンとヌメモンに礼を言った。

「また来るね！」

パタモンも続けて言う。

「ああ、また会える日を楽しみにしているよ。」

アンドロモンとヌメモンは歩き出した二人の姿が見えなくなるまで見つめ続けた。

いつまた会えるかもわからない、彼らの帰りを信じて。

その晩、ある岩場に少年とデジモンの姿があった。太一とアグモンだ。

彼らは3日前の夕頃この世界に訪れてから、数多くの人間を襲い苦しめてきた。

太一は夜空に浮かぶ月をぼーっと見つめ、思いふけていた。

自分は何故こんな事をしているのだろうか、そして、これが自分の求めていた事なのだろうか。

人が苦しみ、叫び、助けを求めている姿を見て、これがお前達のしてきた事の報いだと蹴散らす——これではまるで狂気の沙汰だ。

（俺はこの世界を救いたかった。ずっと、ずっと前から。いつだってこの世界の為に頑張ってきたんだ。俺が人間達を憎み、制裁を加えるのは何一つ間違っていないはずだろう？）

誰が聞くわけでもない、自分自身の心に疑問を投げかけていた。

「どうした、太一。」

様子に気づいたアグモンが太一に呼び掛ける。

「ああ、なんでもない。気にするなよ。」

胸の奥に広がる違和感を覚えながらも、アグモンには決して打ち明けようと思わない太一。

彼は考えれば考えるほど自分自身の事がよくわからなくなり、恐怖を感じていた。その小さな体は小刻みに震えてるようにも思える。

「わかった、なにかあったら言うんだぞ。」

そう言ってアグモンは眠りについた。

—— おや、今更迷いでも生じましたか？

声と同時にあの時の蝶が現れた。

「一体何の用だ。」

警戒しながら太一が蝶に言う。

「おやおや、つい3日前とは私の扱いが随分と違うようですね。どうです、あなたの救いたかった世界は見えてきましたか？」

蝶はまるで今の太一の心が読めているかのように問いかける。

「俺は、正直自分がよくわからないんだ。この世界をデジモン達が幸せに暮らす事のできる世界にしたかった。しかし、俺のやり方は間違っているんじゃないのか……。」

太一は顔を伏せてそう答えた。怒り任せに人間達に報復をしてきた自分が、なにか間違っている事に気が付き始めていたのだ。

「うるさい人間め。そのまま何も考えずにいればいいものを。」

蝶から聞こえる声がどんどん低くなっていく。

「なんだと？」

異変に気付き顔をあげたその時、太一の目の前に巨大なデジモンが現れた。

「お前は……、アポカリモン……。」

太一の目の前にはアポカリモンと無数の黒い蝶が舞っていた。

「何故お前がここにいる！お前はあの時俺達が倒したはずだ！」

怒鳴るようにしてアポカリモンへ言い放つ太一。

「倒しただと？お前達人間ごときに私が倒せるとでも思ったのか？」

アポカリモンはクククと冷笑した。

「私には実態など存在しない。もちろん、お前の言うアポカリモンは確かにお前達に倒された。いや、存在を消された。しかし、私は死にはしないのだよ。お前達やデジモン達の怒り、憎しみ、恐怖が消えない限り私は存在し続けるのだ。」

さらにアポカリモンは続ける。

「私の一番の原動力となっていたのは八神太一、お前そのものだ。お前の怒りや憎しみが私に力を与え、私という存在を復活させた。言うなれば私はお前の影いや、兄弟だ。」

そう言うと、アポカリモンの姿が太一そっくりの姿に変化し、太一の元に歩み寄る。太一は全身の力が抜け崩れ落ちるように膝をつき頭を抱えた。

「俺が、俺がお前を復活させてしまったのか・・・。」

太一を支配していた闇の力は、太一自信の心に存在する闇そのものだったのだ。

「ああそうだ。だが、そんなに落ち込む必要はない。私の願いもお

前と同じだ。」

太一にアポカリモンはささやく。

「ふざけるな、お前と俺は違う！一緒にされてたまるか！」

太一はなぎ払うように抱えた頭を左右に大きく振る。

「何が違うというのだ。お前は这个世界を破滅へ追いやる人間が憎いのだろう？私も人間どもを排除し、这个世界を救いたいのだよ。」

アポカリモンは太一に手を差し伸べる。その手の先からは黒のオーラが沸き出ていた。

「这个世界を救えるのは私とお前しかない。さあ、共に美しい世界を取り戻そう。」

虚ろな目をしながら目の前にいるもう一人の自分の手を取る太一。その瞬間、太一の身に強大な力が注ぎ込まれた。

「うわあああああ！」

太一の小さな体目がけ黒いオーラが一気に注ぎ込まれる。太一は尋常でないくらいの叫び声をあげた。

「どうだ、これがお前の望みを叶える力だ。この力で人間を排除し、デジモンの世界を取り戻すのだ。」

アポカリモンのその声を最後に、何事もなかったかのように辺りは静けさを取り戻し元の風景に戻った。

太一はハァハァと荒く呼吸をしながら自分の手のひらを見つめる。

「これが、世界を救う力。俺の望みを叶える力・・・」

太一は自分の内側から溢れ出る力を感じていた。朝日が少年を赤く照らす。

「俺は——、負けない。」

辺りはすっかり明るくなり、4日目の朝を迎えようとしていた。

母として、仲間として

4日目も太一の搜索が懸命に行われていた。

太一の妻、夏希は警察へ搜索願いを提出しようとしていたがヒカリの目撃証言などから、むやみに他の人間へ知らせない方が良いというヤマトの考により7人のみでの搜索が続いていた。

自分の夫の所在も生存もわからないまま進展しない現状に、夏希は不安な気持ちを募らせていた。

「母さん、父さんはまだ仕事忙しいの？」

キッチンで夕飯の支度をする母親の横で、うろろうしながら父の帰りが無い事に疑問を持つ優佑。

「え、ああ、うん。そうね。父さんまだお仕事忙しくてしばらく帰ってこれないみたいよ。」

無理やり作り笑いをして息子に答える夏希。本当はそんな余裕などなかったはずだ。

「ええー、だって父さん僕と約束したんだよ！ちゃんと夏休みの宿題やれば、1日の集まりに連れて行ってくれるって！それまでには帰ってくるよね？ねえってば母さん！」

母の服の袖をグイグイひっぱり駄々をこねる優佑。今にも不安に押しつぶされそうになっていた夏希の心は限界を迎えた。

「うるさいわね！アタシだって早く帰ってきてほしいって思ってる

わよ！」

夏希は怒鳴りながら両手でバンツと大きな音がするほど強くシンク台を叩いた。

「い、ごめんなさい。」

いつもとは明らかに違う様子の母を見て優佑は小さな声で謝った。何が起こっているのかはわからないが、幼いながら父が帰ってこない理由が仕事ではないと悟ったのであった。

夏希はハッと我に返り横を見ると、目を丸くして呆然とこちらを見つめる息子が立ちすくんでいた。

「ごめんね優佑、大きな声で怒鳴ったりして。父さんもうスグ帰ってくるから、それまで我慢してね。」

夏希は優佑の目線まで腰をかがめ、優佑の頭を撫でながら、まるで自分の気持ちに言い聞かせるかのようにそう言った。すると優佑が逆に夏希の頭をヨシヨシと撫でてきた。

「大丈夫だよ母さん。きっと父さんは帰ってくるよね。それまでは僕が母さんを守るから。」

そう言って母に優しく微笑みながら語りかける優佑。その姿はかすかに父の面影を残していた。夏希は小さな我が子に当たってしまった自分が恥ずかしくなり仕切り直して優佑に言った。

「ありがとう優佑。母さん、今ので元気出た。父さんを信じで待ちましよう。」

今度は先ほどとは変わってニッコリと微笑みかけながら優佑に話しかける夏希。” うん！” と優佑は元気よく返事をして、夕飯の支度をする母の手伝いを進んで行った。

二人とも父の不在に不安で一杯だったが、今はとにかく信じて待つ他なかった。

一方その頃、石田家にヒカリとミミが空に呼び出されて集まっていた。

——ガチャンッ！

カップが皿に激しくぶつかる音がリビングに響き渡る。

「ええ！？ 本気ですか！！？」

大きな声を出しながらテーブルから身を乗り出して空の顔を覗き込んだのはミミだった。

「あ、う、うん。私はそうしようと思っているんだけど。」

ミミの勢いに圧倒され怯む空。

「私は反対です。空さんの身に何かがあってからでは遅いと思います。」

神妙な面持ちで空の意見に反対するヒカリ。ミミも隣でそうだそうだと頷いた。

「二人とも心配してくれてありがとう。でも、やっぱり太一の事故っておけないの。」

なだめる様に空は二人に言い聞かせた。

「でもでもでも！空さんが行くことないですよ！仮にも母親なんですよ！私達。母親に何かあったら一番可哀相なのは子供達でしょ・・・？」

興奮しながらも、しかし冷静に空を引きとめるミミ。彼女は人の死や傷つくことに関しては一番敏感になっていた。空が二人を呼び出した理由は、太一を探しに自分もデジタルワールドへ向かうという事を伝えるためだったのだ。

現に、太一がいなくなってから光子郎の一斉送信メールがひっきりなしにそれぞれの携帯へ送信されてきている。そんなところへ空を送りだすことなんて、ミミは到底賛成できないと思っていた。

「そうね。それでも私は現実世界でジツとしてただ太一の帰りを待つ自分が悔しくて仕方がないの。私もデジタルワールドへ行って太一を探すわ。わがまま言ってごめんなさい。」

空はそう言ってミミとヒカリに頭を下げた。

「空さん頭を上げてください。私達も同じ気持ちです。だけれど、空さんの身に何かあった時、ヤマトさんになんて言えればいいか・・。それに、お兄ちゃんだって悲しむと思います。」

なんとかしてでも空のデジタルワールド行きを止めなくてはいけないと説得をするヒカリ。その後もミミとヒカリによる説得は続いたが、空の意思が揺らぐ事はなかった。

「お願い、私を向こうの世界へ行かせて。わかってるの、自分でも無謀な事だって。だけれど、私にとって太一は特別な存在なの。いつだって太一がいてくれたから今の私がある、いつも私達を引っ張り続けてくれていた彼を、今度は私が助けたいの。」

空は自分が言ったことにハッとして言い加えた。

「あ！も、もちろん仲間としてよ！？」

手のひらを顔の前で振りながら勘違いしないでほしい。と顔を真っ赤にして空は言った。

「空さーん、言わなくてもわかってますって。空さんは昔から太一さんの事になると周りが見えなくなっちゃうから。ヤマトさんが妬くのもわかるなあく。」

ミミはやれやれとポーズを取り、意地悪そうに空を煽った。

「ミミさん、そんな意地悪言ったら空さんが可哀相ですよ。でも、何かあったらすぐにこちら（現実）の世界に帰ってきてください。それだけは約束してください。」

ヒカリも空の熱意に負け、彼女のデジタルワールド行きを承諾した。

「二人とも大丈夫大丈夫。私が空を守るわ。」

そう言って今まで別の部屋にいたピヨモンがひょっこりとリビンググヘ姿を見せた。

「ピヨモン……。」

ピヨモンの力強い発言に安堵の表情を浮かべる空。ピヨモンは絶対に空を危険な目には合わせないと、ミミとヒカリの二人に約束をする。

「わかりました、二人とも気を付けてくださいね。」

そう言ってヒカリは頷く。

「空さんがあちらへいる間は、お子さんはうちで面倒見ますから安心してくださいね。パルモンもきつと喜ぶだろうし！」

ミミはウインクをしながら空に提案した。自分にはこれくらいしかできる事がないとわかっていたからだ。

「ミミちゃん、ヒカリちゃん、そしてピヨモン……。本当にありがとう。」

最初は反対していたミミとヒカリ、そしてピヨモンの三人からの暖かい気持ちに空にヒシヒシと伝わり、空は思わず涙を流した。

「空さん……。もう、泣くのはまだ早いですよ。太一さんになに泣いてんだ！らしくねえ！笑われますよ。」

空の肩を摩りながら明るく振る舞うミミ。そんなミミにつられその場にいる4人が笑顔になった。

ヒカリがふと時計に目をやると、すっかり時間が過ぎている事に気づいた。

「いけない、子供がそろそろ塾から帰ってくる時間になってる。みなさんすみません、私そろそろ帰りますね。」

ヒカリ以外の他の二人も、丁度自分の子供が習いごとから帰ってくる時間だったので今日は解散することになった。
空は二人を玄関まで見送る。

「二人とも忙しい中呼びだしてしまってごめんね。ミミちゃん、明日からうちの子達を宜しくね。ヒカリちゃん、太一は私が必ず連れて帰るわ。」

玄関先で二人に言葉をかける空。

「お子さんの事は任せてください。美味しいご飯作らなくっちゃ！」

「空さん、お兄ちゃんをお願いします。」

ミミとヒカリは空にそう言うのと帰路へついた。

「あーあ、なんだか妬けちゃうなあ。」

帰り道、そう口を開いたのはヒカリだった。

「何が妬けちゃうのヒカリちゃん。」

ヒカリの意味深な発言に問いかけるミミ。

「え、いや、なんでもないです・・・。」

ミミのツツコミに慌ててそっぽを向きごまかすヒカリ。

「なーんか、怪しいわねえ。ヒカリちゃん、隠し事は良くないわよ？お姉さんに話してごらんなさい？」

不敵な笑みを浮かべながらミミはヒカリに詰め寄った。これは逃げられないと観念したヒカリはミミに話し始めた。

「なんか、空さんが羨ましくて。」

ヒカリは目線を下に向けながら話すした。更に話を続けた。

「空さんは自分がヤマトさんとお兄ちゃんを大事にしてるって言ってましたけど、実はあれって逆なんですよ。ヤマトさんとお兄ちゃんにとって空さんは特別な存在。二人にとってはなくてはならない女性なんですよね。」

二人の足がその場に止まる。

「お兄ちゃんきつと今でも空さんの事大好きだと思います。もちろん恋愛対象とかじゃないですよ。昔言ってたんです、空は俺に元気をくれるんだ。だからあいつが悲しんだり、苦しんだりする時は俺が助けてやらなくちゃいけないんだ、俺が空を守るんだって。」

切ない表情を浮かべるヒカリを見てミミは”はあ・・・。”と溜め息をついた。

「もう、ヒカリちゃんったらいつまでたってもそうなんだから。」

苦笑いしながらヒカリに言い放つミミ。何故ミミがそう言ったのか理由が分からずキョトンとしていた。

「あのね、そういうの世間ではなんて言うかわかる？ブラコンって言うのよブ・ラ・コ・ン！」

腰に手を当て、片手を上げながら呆れた表情で話すミミ。

「ブ、ブラコンなんかじゃないです！それに私にだって夫や子供がいますし！」

ムキなって顔を赤くしたままヒカリは言い返した。その慌てようがあまりにも面白かったので、さらにミミはヒカリを煽りたてた。

「だーってえ、太一さんが空さんの話するとヒカリちゃんすぐに機嫌悪くなるじゃない。」

クスクスと笑いながらヒカリをからかうミミ。しかし後に彼女はこう付け足した。

「でもわかるな、その気持ち。空さんはいつだってみんなの事を引きつけてやまない人だもの。私も空さんのような素敵な女性になれたらな・・・なんて良く考えたわ。」

ミミから初めて聞く素直な気持ち。ヒカリはミミの話に聞き入った。

「空さんは器用でなんでもできるし、私みたいに我がままじゃないしいつも懂れてた。でもさっき空さんが私達に頭を下げた時思ったの。私達お互いに支え合ってきた仲間なんだよねって。いつも空さ

んに頼ってきたけど、今度は私達が空さんや他のみんなを支えてあげなくちゃいけないんだって。私、空さんに必要とされてるって感じて本当に嬉しかった。」

その言葉を聞いて、ヒカリは自分の中のモヤモヤの原因がわかったような気がした。

「私もそうだったのかも知れないです。自分の持っていないものを持っている空さんが羨ましかったんだと思います。逆に何にもできない自分がとても齒がゆいんです。・・・なんだか器の小さい女ですよね私。」

自分自身に恥ずかしくなり下を向くヒカリ。その横でフフフっとミミはヒカリに笑いかけた。

「そうね。私達はいつだって空さんのようになりたかった。けれど、今は違うわ。私もヒカリちゃんも空さんにないものたくさん持っているもの。私は純真、ヒカリちゃんは光の紋章の持ち主よ？どれも愛に負けないくらい素敵な紋章よ。私達にしかできない事はたくさんあるわ。」

ミミはヒカリより数歩前に出て夜空に向かって手を広げ、うーんっと伸びをした。

「私は空さんが太一さんを連れ戻してくれるって信じてる！信じてるって事は大切よ。その気持ちひとつでも何かが変われると思うの。」

表情さえ見えなかったが、全て偽りのないミミの素直な気持ちの表れだった。ヒカリはミミの隣に追いつきつぶやいた。

「私にも何かできるんでしょうか。空さんでもミミさんでもない、私が持つ光で・・・お兄ちゃんの闇を救えるのかな。」

自信がなさそうに胸の前で拳を握りしめるヒカリの手を、ミミはそっと取り言った。

「大丈夫、あなたの光はなによりも強く輝いている。きっと太一さんの闇も明るく照らしてくれるわ。自信を持って。」

ヒカリの手を握るミミの手からは、とても優しい気持ち伝わってきていた。思わず涙がこぼれそうになる。

「・・・っと。空さんと言いヒカリちゃんと言い、まだ泣くのは早いわよ。涙は太一さんが戻ってきた時に嬉し涙として流しましょう？」

ヒカリはごめんなさいと慌ててミミに謝った。気がつくと、分かれ道に差し掛かっていた。

「さあ、明日から我が家は賑やかになるし、太一さんが帰ってくるまで頑張らないと！」

ミミはそう言って大きく息を吸った。

「私にも何かできる事があれば言ってくださいね。」

ヒカリがミミにそう言うのと、”ええ、是非お願いするわ。ありがとう。”と返事が返ってきた。

そして二人は別れ、お互いの家へ帰って行った。

その晩、寝静まった二人の我が子の寝相を直している空とピヨモンの姿があった。

「空・・・本当は向こうの世界に行くのが怖いんじゃないの？」

ピヨモンの空の本心をつくような問いかけに、空が動きを止めピヨモンに笑って見せた。

「怖くないって言ったらウソになるかな。でも大丈夫。ピヨモン、あなたがいつもそばにいるもの。」

震える手をピヨモンにばれない様に抑えながら答える空。顔は明らかに強張っている。また現実世界へ帰ってこれる保証もない、もしかしたらこれが最期になるかもしれない・・・かつて共に旅をした友変わり果てた姿が彼女の不安を増大させ、恐怖が心を蝕もうとしていた。その様子見て、ピヨモンは決心する。

「私が空を守るから安心して。絶対にみんなでまたこっちの世界へ帰ってこようね。」

空に寄り添うようにぴったりとくっつくピヨモン。ピヨモンの暖かさを肌で感じながら、二人の子供に目をやる空。

「ええ、そうね。二人とも、お父さんとお母さんしばらく留守にすればいい、良い子にして待っていてね。すぐに帰ってくるからね。」

空は子供たちの頭を撫でながらささやいた。その横顔は昔のあどけ

なかった少女の面影はなく、優しくも凜としたたくましい母の顔であつた。

「私達もそろそろ寝ましょう。明日から頑張らないと、ピヨモンおやすみなさい。」

「おやすみ空。」

明日からの旅に不安を抱えながら、二人は眠りについた。

それぞれの思いとは裏腹にその時は刻一刻と近づいていた。

c r o s s

八神太一が現実世界から姿を消して早5日が経とうとしていた。依然として彼に直接結び付く情報が少なく、選ばれし子供たちには焦りの色が見えていた。

「空あ、そろそろ休憩にしましょう？」

空に声をかけるピヨモン。今朝デジタルワールドへ来た空とピヨモンは、朝から休みなく太一を探し歩き続けていた。

夢中になって歩き続ける空を心配して、休憩をしようと提案するピヨモン。しかし、空は時間がないと先を急ぎたい気持ちで一杯だった。

「うーん、もうちょっと。あと1時間したら休憩しましょ。」

さっきからそんな調子の返事しかない空。ピヨモンは痺れを切らして言った。

「空、いい加減休もう。太一を思う空の気持ち、私にもわかるよ。だけど空の体も心配。自分の事も大切にしてあげて。」

え…っ？という表情でピヨモンに振り返る空。一刻も早く太一を探さなくてはという事ばかり考えていたが、冷静になってみると自分の足はガクガクとして疲労が蓄積しているのが目に見えてわかった。一つの事に集中すると、周りが見えなくなってしまうのが自分の悪い癖だという事を思い出す。

「ゴメン。私また周りが見えなくなっちゃってた。ピヨモンの言う

通りね、少し休みましょう。」

空はピヨモンに謝り、二人は近くの岩場で休憩を取る事にした。今朝作ってきた弁当を広げ、いただきますと大きく声を合わせて二人は食事を始める。

「なんだか懐かしいね。こうしてお弁当広げるのって。」

ニコニコしながらおにぎりを頬張るピヨモン。空はその姿がとても愛おしく、フフフッと笑いを堪えきれなかった。

「本当、懐かしいわね。あの頃はみんなでこうやってご飯囲んで、ああでもないこうでもないって・・・皆大きくなってからはそんな事もなくなつて。繋がりがどんどん薄れていくのがわかるわ。」

手に持ったお茶を遠い目で見つめながら、昔と今の自分や仲間たちとの繋がりについて改めて考える空。

「空・・・。」

「でもね、きつとこういう事も全部含めて大人って呼ぶんだろうね。確かに昔みたいにはバカ騒ぎしたりはできないけど、それは皆が自分の進むべき道を見つけたからよね。8人いたら8通りの人生があるもの。決して、私達の絆が弱くなったわけじゃないのもわかってる。」

そう話す空の表情はどこか寂しげだった。

「昔に戻りたいって今でも思う?」

愚問だと思ったが、ピヨモンはあえて空に聞いてみる。

「そうね、またあの頃に戻ってみたいかな。・・・なんてね。嘘嘘！あ、ほらピヨモン口の横にご飯粒ついたままよ。取ってあげる。」

空がピヨモンの口元まで手を伸ばす。その瞬間、急に辺りが暗くなった。いや、正確に言えば暗くなったのではなく、何かの影に覆われたようだ。

「あの頃が懐かしいか？空。」

聞き覚えのある声に緊張が一気に高まる。空とピヨモンは警戒しながら自分達の後ろを振り返った。

ツンツンの髪、バンダナ、ゴーグル、リストバンド・・・どれも初めて見る物ではなかった。隣にいるのはブラックウォーグレイモン、そしてあの顔は――

「太一！」

彼は自分の名前を呼ぶ声に”よう。”とだけ返事をした。彼女達の目の前に現れたのは、5日前から現実世界で行方不明になっている八神太一だった。

「アンタ今まで一体何して・・・、わ、私・・・凄い心配したんだから。」

言いたい事が山のようにあった筈なのに、言葉にできないもどかしさとやっと出会えた安心感からか、空の目からは大粒の涙がこぼれた。上手く話せない空に代わってピヨモンが太一に話しかける。

「空も皆も太一とウォーグレイモンの事心配していたんだよ。さあ、皆の待つ世界へ帰ろう?」

そう言ってピヨモンは彼らの元へ駆け寄ろうとした時だった。バンツと、ピヨモンの体に衝撃が走り小さな体が吹き飛ばされる。太一に近づこうとしたピヨモンの体は、ブラックウォーグレイモンの爪によって軽々と弾き飛ばされたのだ。

「ピヨモン!」

空は急いでピヨモンの近くに駆け寄り、彼女を抱きかかえた。

「大丈夫?ピヨモン。」

心配そうに覗き込む空に、問題ないと答えるピヨモン。

「俺に易々と近づくな。」

彼女らを横目に淡々と彼から発せられる言葉に、空は啞然とした。

「一体何のつもりなの。」

空の言葉に一瞬口元を緩ませ、太一は答える。

「何のつもり?笑わせるな。お前のピヨモン、さっきから目障りなんだよ。」

その言葉で空はスグにわかった。目の前にいるのはいつもの太一じゃない、何か様子がおかしいと。同時に大切なピヨモンへ危害を加えた事に激しい怒りを覚え、キツときつく太一を睨み返した。

「ふざけないで！私の大切なピヨモンをこんな目に合わせて・・・絶対に許さない！」

「そんなにピヨモンが大切か？ならもっと丁寧に扱ってやらないとな。」

太一はクイッと指を曲げ、ブラックウォーグレイモンに指示を出す。ブラックウォーグレイモンが彼女達にどんどん近付き、空が抱きかかえるピヨモンを取りあげた。

「やめて！ピヨモンに何をするの！？今までデジモンではなく人間にだけ危害を加えてきた筈なのに、何故ピヨモンにまで攻撃をするのよ！」

空は必死にブラックウォーグレイモンを制止しながらハツとした。

（目的は私・・・？）

「太一、あなたは何が目的なの。私なら逃げも隠れもしないわ。だからピヨモンを離して。」

空がそう言うと、ブラックウォーグレイモンは取り上げたピヨモンを地面に下ろした。どうやらやはり目的はピヨモンではなく空だったようだ。

「ふうん、さすが察しが良いようだな。俺の目的が知りたいか？ 一緒にについてこい。」

太一の誘いに一瞬躊躇したが、これ以上ピヨモンを傷つけるわけにはいかない。空は、わかったと頷きブラックウォーグレイモンに飛び乗った。

「空！ 行ってはダメ！ 行くなら私も一緒に行くわ！」

声を振り絞って引きとめようとするピヨモンを、ブラックウォーグレイモンが軽くあしらう。

「俺が用があるのは空だけだ。お前には用はない。」

苦しむピヨモンを見て、空は心が引き裂かれる思いで言った。

「ピヨモン、私なら大丈夫。きっと帰ってくるから待っていて！」

そして自分の左耳に手をやりピアスを外し、ピヨモンに向かって投げ何かを言ったように見えた。声は聞こえず口の動きだけでしか読みとれなかったが、確かにこう言っているようにピヨモンには見えた。

” 信じてる ”

辺り一帯が砂嵐に覆われ何も見えなくなった。時間が少し経ち、砂嵐が晴れた頃には彼らの姿はもう消えていた。ピヨモンは考える間もなく、光子郎の元へ向かった。

ピヨモンから受けた報告は、選ばれし子供たちにスグに伝えられ、全員が光子郎の研究所へ集合した。

「何故空をデジタルワールドへ行かせたんだ！」

ヤマトの怒声が研究所へ響き渡る。そこには委縮しながらも、ヤマトに懸命に謝り続けるミミとヒカリの姿があった。

「ごめんなさい。私がつとちゃんと空さんを引きとめていればこんなことにならなかったのに。」

ヒカリはヤマトに頭を下げ続ける。そこにミミが割って入る。

「違うの、最後までヒカリちゃんは今空さんを引きとめたわ。私が空さんを後押しさせてしまったのよ。だからヒカリちゃんは悪くないんです。」

ヒカリを必死に庇うミミだったが、ヤマトにとってはそんなの正直どうでも良かったのだ。愛する妻が危険にさらされた怒りと、どうする事も出来ない自分への腹立たしさで怒り狂っていた。

「兄さん、二人もこれだけ謝っているんだから、それくらいでやめておけよ。」

タケルがヤマトをなだめるが、ヤマトの怒りはどうにもこうにも収拾がつかないところまでできていた。

「うるさい！大体、よりによって何故空だけがこんな目に合わなければいけないんだ。太一の野郎、絶対に許してたまるか。」

怒りの矛先は次々に他の者へと向けられていく。

「いい加減にしろよ！」

ヤマトではない別の人物の声が響き渡る。その声に全員が口を閉ざし、研究所が静まり返った。ヤマトが声の元へ目をやると、そこにいたのは光子郎だ。

「誰が悪いとか憎いとか、そんな事言い合ってる場合じゃないだろ。僕達は8人で一つなんだ。ここでいがみ合っても意味がないだろ。」

いつもと明らかに違う口調の光子郎に、一同は驚きを隠せなかった。一番驚いていたのは光子郎本人だが。

ヤマトは光子郎の言葉で我に返り、皆に謝った。

「皆、取り乱したりしてすまなかった。ちょっと席を外させてもらうよ。」

ヤマトはそう言うと、研究所の2階にあるバルコニーへ向かった。その様子を見て心配した丈が”僕に任せて”と言ってヤマトの後を追いかけた。

部屋中に重たい空気が流れ続けていた。空が太一達と一緒にいる以上、下手な真似はできない。部屋に残された光子郎・ミミ・タケル・ヒカリの4人は打開策を見出せぬまま、只々立ち尽くすばかりだった。

一方、バルコニーにはヤマトと丈の姿があった。丈はヤマトに缶コーヒーを放り投げ、バルコニーの手すりにもたれかかった。

「さつきはすまなかった。俺とした事がついカツとなって、皆に酷い事言っちゃった。」

丈からもらったコーヒを開け、頭を冷やすかのようにグイグイと喉に流し込むヤマト。

「いや、謝る必要なんてないさ。君の気持ちは皆よく分かっている筈だから。僕だって、自分の奥さんが空君みたいな状況に巻き込まれたら、それこそ気が狂ってしまうかもしれないよ。」

決してヤマトを責めようとせずに、話に耳を傾ける丈。そんな丈に、ヤマトは今まで我慢していた事を全て打ち明けた。

本当は何もできない自分にもどかしさを感じている事、誰も悪いとは思っていない事、太一も空も大切な存在で一刻も早く二人を助け出したい事。全てを話し終えた後、そろそろ戻ろうかと丈に促され、二人は他の4人のいる部屋へ引き返した。

二人が部屋に戻ると、残された4人の表情は相変わらず曇ったままだった。するとヤマトが

「さあ皆！力を合わせて太一達を救い出そうぜ！」

と、さつきとは打って変わって、何か吹っ切れた様子でその場にいた全員を励ます。それにつられ、ピヨモンが空に渡されたピアスとメッセージを皆に伝えた。

「さつき空が連れ去られる前にこう言ってたの。”信じてる”って。きっと空は私達が助けに来るのを待っている筈よ。皆最後まで諦めずに頑張りましょう。」

その言葉を封切りに、一気に士気が高まった。

「空さんの居場所がわかりました！」

光子郎が皆をデスクに呼び集め、PCの画面をモニターに映し出した。携帯のアドレスを使って、現在空がいるエリアを割り出したのだ。そのエリアはどうやら簡単には行ける場所ではなく、デジタルワールドへ入れたとしても、最寄りのゲートから数日はかかる場所にあるという。

「しかし何故こんな場所へ……。」

光子郎は空の現在地に首を傾げた。そこはデジモンの古代遺跡、つまり古いデータが保管されているエリアだったのだ。

「光子郎、ここへスグに俺達を転送させることはできないのか？」

ヤマトのその言葉に光子郎は首を横に振った。

「残念ながら、今の僕達をデータ化させてこの場所へ転送させる事はできません。大人になった僕たちではデータ量が莫大過ぎる為、ゲート以外でのデジタルワールドへの侵入は不可能なんです。」

せっかくあと一歩だというのに届かない悔しさが、全員の中に立ち込めた。

「光子郎はん、わてらでしたら転送可能でっしゃろ？」

光子郎の手元からヌツとテントモンが顔を出した。テントモンだけではない、他にガブモン・ゴマモン・パタモン・パルモン・テイルモン、そしてピヨモンも揃っていた。

テントモンの気転により、先にそれぞれのパートナーデジモン達が空の元へ向かう事になった。

「皆さん、頼みました。」

そう言って光子郎は転送ボタンを押した。

「任せときなはれ。ほな、行ってきますわ。」

P Cにデータとして取り込まれたテントモン達は空の元へと急いだ。

見えない心

その頃、太一・空・ブラックウォーグレイモンは古代遺跡の前に来ていた。ブラックウォーグレイモンは太一と空を下ろすと、見張りとして遺跡の前で待つことになった。

「ここに私を連れてきて何をするつもり。」

太一と一定の距離を保ちながら、遺跡に入ろうとする空の問いかけには反応せず、先へ進む太一。それを追いかける様にして空が遺跡に足を踏み入れようとした時、横からスッと何かが伸びてきた。

「ブラックウォーグレイモン？」

空の行く先をブラックウォーグレイモンが手でさえぎっていた。そしてブラックウォーグレイモンに視線を向けると彼は空を真っ直ぐ見つめ口を開いた。

「ここから先、君の行く末に待つのは暗く冷たい闇の世界だ。」

光が射す事のない彼の眼差しに吸い込まれそうになり、目線を反らす事が出来ない。

（体まで動かない。どうして。）

空は心の中で何度も”動け”と自分に言い聞かせるが、体の自由が完全に奪われその場に立ちすくんでしまった。
沈黙は続く。

（――空。）

頭の中をかすかに自分の名前を呼ぶ声が過ぎった。

（ピヨモン？・・・そうだ、私はここで立ち止まっていたはいけない。私達には帰る場所が有る筈よ。）

空は一瞬目を瞑り、ブラックウオーグレイモンへ再び視線を向けた。

「それでも構わないわ。たとえどんなに深い闇に覆われていようと、私は必ず太一もあなたも救い出してみせる。絶対に皆で帰るのよ。」

決してブレる事のないその瞳からは、彼女の覚悟がうかがい知れる。それを見て、ブラックウオーグレイモンは彼女の前に出した手をおろした。

「それでいい。いつもの空だ。」

急にブラックウオーグレイモンが口調を変え、彼の眼差しに光が戻る。

「ブラックウオーグレイモン・・・、あなた本当は分かっていたのね。」

ブラックウオーグレイモンはその言葉にコクンと頷いた。

「今の太一は強烈な闇の力に支配されてしまっている。俺がこの姿でいれるのもその力が影響しているからだ。闇の力の前では俺はどうする事もできない、太一が持つ闇の力は俺の意思とは無関係に、俺の体を意のままに操る事が出来る。」

その言葉に空は衝撃を受ける。

「じゃあもしかして、ピヨモンを跳ね除けたのも太一の・・・？」

「ああ、あの時ピヨモンには申し訳ない事をした。本当はあんな乱暴な真似したくはなかったんだ。」

仲間を傷つけてしまった事を悲しそうに話す彼の姿を見て、空はこの話が嘘ではないと確信した。

「聞いてくれ、この先に一体何があるのかは俺にもわからない。ただ・・・。」

「ただ？」

言葉を詰まらせるブラックウオーグレイモンに空は聞き返す。

「空、俺は君を、君達仲間を信じたい。太一を救い出してほしいんだ。」

太一を思うブラックウオーグレイモンの気持ちだが、悲しいくらいに胸に突き刺さる。

「当たり前よ、太一もあなたも私達のかげがえのない仲間だもの。必ず私が連れて帰ってみせるわ。」

空はニツコリと笑い約束を交わし、太一の後を追った。

（——頼んだよ空。）

ブラックウォーグレイモンは空の背中を目で追い、彼女の無事を祈った。

遺跡の中に入ると、みるみる遺跡内の天井が高くなっていくのがわかった。気がついた時には上着の袖が自分の腕をすっぽりと覆っていた。

「わ、一体何なのこれ。私どうなってるの。」

空は驚いて太一に問いかけた。彼女が驚くのも無理はない、太一同様に子供の頃の自分の姿に戻っていたからだ。

「ああ、良く似合っているじゃないか。まるで昔に戻ったみたいで懐かしいだろう?」

太一は空の方へ振り返し、薄ら笑いをした。表情こそ笑っているように見えるが、気味の悪い笑みを浮かべる太一に、空は嫌悪感を覚えた。

その後2人は薄暗い遺跡の奥へとどんどん進み、まるで宇宙空間のような大きなフロアに出た。

空は何故か初めて来た気がしなかった。

「覚えているだろう?ここを。」

太一は手を広げ空に問いかけた。

「ここは25年前の・・・。」

空にはこのフロアが何なのかスグに分かった。

「そう、ここは25年前あの戦いを繰り広げた場所だ。あの時俺達は、わずか数日間で泣き笑い、苦楽を共にし互いにかけてがえのない仲間を手に入れた。」

太一は遠く彼方を見つめながら語る。

「・・・つもりだった。」

その言葉に空の表情は固まる。

「俺はそんな幻影みたいな時間が、いつまでも続くと思っていた。だが現実には違った、大輔達が現れると俺達の力自然と消滅していった。そしていつしか世間の目は、俺達の事をヒーローから役立たずへと見方を変えた。」

とんだ茶番だと自分を皮肉る太一。

「ディアボロモンの時もそうだ。敵にまるで歯が立たない俺達を応援する者なんていなかった。俺は自分の無力さを世間に晒したただけだ。わかっていたんだ、誰も守る事のできない俺を必要としてはいない事を。」

「そんな事ないわ。」

空は否定をするものの、その後の言葉が続かないでいた。

「何も違くないだろう？仲間だと思っていたお前らも戦いを終え、平穏な日常に戻ったら誰も俺を必要としない。俺に残されたのは仲間でも何でもない、とてつもない喪失感だけだった。」

太一と空の周りには黒い霧のようなものが立ち込める。

「愛が何だ？友情が何だ？そんなもの全てまやかした。人間達が欲しいのはそんな物じゃない、地位や権力を手に入れ、自分の支配下を広げる事で満たされる。そのためなら手段を選ばない。」

もう自分の知っている彼とは別人のようだった。彼から発せられる言葉からは哀愁しか感じる事が出来ない。

「太一もうやめて。」

空は悲しさと押し潰される寸前だった。彼が抱えていたものに気づく事ができず、ここまで追いやってしまったのは自分のせいだと責めるが、彼女の言葉など耳には入っていないかのように太一は語り続ける。

「このデジタルワールドの事も自分達の道具としか見ていない。建前ではデジモンはパートナーだと言うが、実際にはどうだ。彼らをまるで奴隷のように扱う人間達が俺は許せなかったんだ。」

目の前にいる彼は、空に背を向けたまま肩を震わせていた。怒りや憎しみを抑え、必死に冷静さを保とうとしているように見える。いつの間にか空の目からは大粒の涙が溢れていた。

同時刻、研究所の一室で頭を悩ませる一人の男の姿があった。

「どうすれば、どうすれば僕らはあそこまで行く事が出来るんだ。」

モニターを目の前にしてブツブツと呟いているのは光子郎。

自分達のパートナーデジモン達をあちらの世界へ送り出したものの、肝心の自分達はここから状況を見守る事しかできずにいた。

「ううゝ・・・・・・。」

光子郎は頭を物凄い勢いでかきむしった。

「お、おい光子郎大丈夫か？そんなに頭かいてたら禿げるぞ。」

そう言っつて、苦笑いを浮かべながら近づいてきたのはヤマトだった。光子郎にコーヒーを差し出す。

「ありがとうございます。それと、さっきは怒鳴ったりしてすみませんでした。僕とした事が取り乱してしまっつて。」

「いや、俺の方こそ・・・・。みんな精一杯頑張っているのに、責め立ててしまつてすまなかつた。」

モニターを眺めながらコーヒーをすする光子郎、その横で言葉少なげに語るヤマト。

他の4人は部屋から出はらい、部屋には二人きりだった。気まずさからかお互いに視線を合わせようとはせず、重い空気が流れる。

”ピピッ”

音と同時にテントモンがモニターに映し出される。

「光子郎はん、もうすぐ目的のエリアに着きまっせ。そちらの様子はどうでっか？」

各々のパートナーデジモン達は間もなく目的地に到着するようだ。

「その事なんだけど、もう少し時間がかかりそうだから、先に周辺の様子を調査してほしいんだ。僕達もできる限り早くそちらに向かえるようにします。」

光子郎は曇った表情でテントモンに指示を出す。

「了解。ほな、また後で連絡しますわ。」

「ええ、お願いします。」

そう受け答えをして、光子郎はテントモンとの回線を切ろうとマウスに手を伸ばした時だった。

「光子郎はん。」

テントモンに呼びとめられる。

「どうしたんですテントモン。何か言い忘れた事でも？」

「そんな顔、らしくないですわ。光子郎はんはわいの自慢のパートナーさかい、もっと自分に自信を持ちなはれ。」

窮地に追い込まれた今の状況を脱する事の出来ない自分に、自信を失いかけていた光子郎を見て喝を入れる。

本来の彼はこんなものではないと、長年連れ添ったパートナーにテントモンは絶大な信頼を寄せていた。そして何としても彼に今の苦境を乗り越えてほしかったのだ。

その言葉に思わず笑みがこぼれる光子郎。

「ふふ、ありがとうテントモン。そうですね、僕の力を以てすればこんな物朝飯前でした。」

テントモンと会話をする光子郎の目はキラキラと輝きに満ちていた。

「ほな、待ってまっせ。」

プツッと回線が切れる。それと同時に、光子郎は自分に猛チャージを掛けた。

「ようし、やってやるぞー！」

彼の声は部屋中に響き渡った。その様子を横で見ていたヤマトが光子郎に声をかける。

「おいおい、お前だけに良い格好はさせないぞ。一緒に頑張ろうぜ。」

ヤマトは光子郎の目の前に手を差し出した。

「ヤマトさん……。ええ、もちろん！」

差し出された手とガッチリと握手を交わす光子郎。二人の間に流れていた重たい空気は一気に吹き飛び、笑みすらこぼれていた。

「何々、男の友情ってやつ？　ったく、本当に勝手なんだから。少しは心配したこっちの身にもなってよね。」

その声に二人は後ろを振り返る。

するとそこには、丈・ミミ・タケル・ヒカリの4人が立っていた。先ほどの光子郎の雄たけびを聞いて、様子を見に来たのだ。

「本当、ミミ君の言う通りだよ。僕はどうなってしまいかとハラハラだったんだから。年長者をもう少し労わってくれないかな。」

「丈さん、年長者っておじいさんじゃないんですから。兄さん、光子郎さん、僕達も力になりますよ。」

「皆でお兄ちゃんと空さんを、絶対に連れて帰ってきましょう。」

ミミの言葉を封切りにして次々と口を開く仲間達。バラバラになった心がまた一つになろうとしていた。

「でも、どうやったらあそこに私達は行く事が出来るのかしら。」

ミミが頭を傾げる。

「お兄ちゃんのように子供の姿なら、データ容量が軽そうなのに。」

「それだ！」

ヒカリが言ったその言葉に光子郎が大きく反応した。

「そうです、そうですよ！　僕達が子供に戻ればいいんですよ！」

光子郎の頓珍漢な発言について行けずにいる仲間達。

「ちょっと待ってください。いくらなんでもそれは無理じゃないですか。」

タケルが光子郎に反論する。一般的に考えたら彼のように、そんな事無理に決まっていると思うのが普通だ。

「いいえ、不可能ではないんです。僕達の行く先はデジタルワールド。データで作られた世界です。こういうことかわかりますか？」

その問いかけに丈が頷いた。

「なるほど、そういう事か。つまり僕達がデータ化される時に、子供の姿までデータを簡略化させればいい・・・って事だろ？」

「正解です。生身の人間の僕達では不可能ですが、データならいくらでも変形させる事が出来ます。それなら全員転送が可能はずです。」

その後、光子郎は仕組みを全員にわかりやすいように丁寧に説明し準備を整えた。

”皆さんできましたよ。”と光子郎の声を合図に、再び部屋に集まる仲間達。

「良いですか皆さん、このモニターに手をかざしてください。全員がかざし終わったら転送開始です。」

光子郎の指示に従い、全員がPCのモニターに手をかざした。ゴウンゴウンと機械の音とともに、全員の体をまばゆい光が包み込

む。

「行きますよ……。」

そう言って光子郎がエンターキーを押した瞬間、真昼の様な光と共に6人は姿を消した。

（空、太一今行くぞ。）

既に夜が明け、時は太一が消息を絶ってから6日目の朝を迎えようとしていた。

あと一つ

選ばれし子供たちが遺跡へ向かう中、それぞれのパートナーデジモン達は一步先に遺跡へ到着した。

「うわあああ！」

叫び声の後にドスドスと、何か叩きつけられるような音がした。

「テテテテ……。みんなあ、早くオイラの上からどいてくれよお。」

音の正体は、ゴマモンを下にして折り重なるように倒れこんだデジモン達だった。

「大丈夫よ、それくらいじゃ死にはしないわ。」

潰されて今にも息が上がりそうなゴマモンをよそに、テイルモンはシレっとした態度で立ち上がった。

「テイルモン、そんな冷たい事言っちゃゴマモンが可哀相だよ。」

難なく被害を回避したパタモンが後から追ってきた。

「……。というより。」

ゴマモンと同じく押しつぶされていたパルモンが口を開いた。

「なんでアンタ達まで一緒に潰されてるのよ！二人とも飛べるはず

でしょう!？」

”重いから早くどいてよ”と叫ぶパルモンの上に重なるのは、テントモンとピヨモンだった。

「す、すんまへん。わて、最近運動不足で足腰が……。」

「私は食べすぎで体が思うように動かなくて……。」

二人は中高年のような言い訳を並べながら、パルモン以下、下にいるデジモン達に申し訳なさそうに謝った。

「皆、水を注すようで悪いが、どうやら俺達の歓迎会を開いてくれるみたいだぞ。」

周りを見渡して表情を険しくするガブモン。気がつくとな彼らの周りは、到底味方とは思えないたくさんのデジモン達により包围されていた。

「っ！ 私たちは先を急いでいるのよ、そこをどきなさい！」

テイルモンのその声を合図に戦闘が始まるが、敵の方がこちらの数を上回っているのは明らかであった。

長らく戦いから遠ざかっていた彼らの必死の抵抗も空しく、ボロボロの体で全員息絶え絶えとなり、見るも無惨な光景が広がる。

「こんな……ところ……で、倒れるわけには……いかないんだ。」

ガブモンが残り少ない力を振り絞り、立ち上がろうとした時だった。

（ブラックトルネード！）

——ブオオッ！

辺り一体をもの凄い衝撃波囲み、次々と敵を吹き飛ばしていく。

「一体どうなってるんや。」

目の前で巻き起こるその光景に呆然とする一同。パタモンの耳がわずかに何かが接近してくる気配を感じた。

「皆、何かくるよ。気をつけて。」

彼らは構えてその時を待った。そして砂嵐を巻き上げながら、彼らの前にそれは現れた。

「ブラックウオーグレイモンよ！」

ピヨモンが青ざめた顔で目の前のデジモンの名を呼ぶ。

ブラックウオーグレイモンは鋭い眼光でピヨモン達を睨み付け、こちらへどんどん近づいてくる。

「くそっ。万事休す、ここまでか。」

足を引きずり、立つのもままならないガブモンを始め、パートナーデジモン達に諦めのムードが漂う。

「おい、大丈夫か。」

「え・・・？」

ガブモンはブラックウォーグレイモンの言葉に耳を疑った。

「立てるかガブモン。」

「あ、ああ。」

ブラックウォーグレイモンは地面に片膝をつき、次々と彼らの体を起こし始めた。

「どうもありがとう。」

最後に起こされたパルモンが礼を言い終わると、その場にいる誰もが思うことをピヨモンが投げかける。

「あなたは何を考えているの。敵である私達を助けるなんて、どう考えても変よ。」

その問い掛けに、ブラックウォーグレイモンは頑なに口を鎖したままでいる。

「黙ったままでは何も解決しないわ。お願い、何故私達を助けたのか教えて。」

パルモンがそう訴えると、たった一言返事が返ってきた。

「話す事は何もない。」

その答えに肩を落とすガブモン達。彼との間に出来た溝は埋まる気

配をみせない。

「いや、きちんと話してもらおうぞ。」

聞き覚えのある声と共に、6人の子供達が姿を現した。

「ヤマト！みんな！」

「大丈夫かガブモン。」

ヤマトはボロボロになったパートナーの元へ駆け寄り、事態が悪化の一途を辿っている事を察した。

「ああ、大丈夫さ。ブラックウオーグレイモンが助けてくれたから。他の皆も。」

そう言ってガブモンはブラックウオーグレイモンに目をやるが、彼は誰とも視線を合わせようとはせず、ずっと下を向いたままだった。

「一体お兄ちゃんとあなたの身に何があったの？」

ヒカリが詰め寄り観念したのか、ブラックウオーグレイモンはこれまでの事を全て話した。

「太一さんもあなたも孤独に押しつぶされそうだったのに、私達はそれさえも気づいてあげられなかった・・・。」

ミミは今まで太一に頼りっぱなしでいた自分の不甲斐なさ、太一や

ブラックウォーグレイモン達の苦悩に気づくことのできなかった事を悔いた。

「違う、悪いのは全て俺だ。太一の心の闇を救うどころか、自分まで隙を付け入られてこの様だ。最低なパートナーだよ。」

ブラックウォーグレイモンの声は、悲しみと自責の念で震える。

「太一と約束したんだ、この世界をもっとより良いものにすると。それがこんなことになってしまいうんて……。俺が、俺が望んだのはこんな世界じゃなかった筈なのに。」

自分を責めるブラックウォーグレイモンを見ていられなくなったヒカリは、彼に寄り添い語りかける。

「大丈夫、もう大丈夫だから。あなたはもう十分に頑張ったわ。」

彼を決して責めることなく受け入れるヒカリ。彼の起こした過ちを、彼一人に背負わせるには余りにも大きすぎた。

「頼む、君達の力で太一を助けてやって欲しい。こんな酷い事をしておいて、自分でも無茶苦茶な事を言っているのはわかってるが、今は君達の力を貸してほしい。俺はどうなっても構わないんだ……。ただ、太一だけは、俺の大切な友達だけは助けてほしいんだ。」

真っ直ぐな眼差しで子供たちを見つめ、一言一言を噛みしめながら話す。

「馬鹿言うな、お前も一緒に帰らないと意味がないだろ。俺もお前も太一を思う気持ちは一緒だ、それが仲間ってやつだろ。」

ヤマトの言葉に、その場にいた全員が頷く。

「仲間……、久々に聞く響きだ。」

ブラックウオーグレイモンを光が包み込み、彼はコロモンへと姿を変えた。

ヒカリがコロモンをそっと抱き上げる。

「おかえりコロモン。」

「ヒカリ、皆……僕は取り返しのない事をしてしまった。太一を……、太一を頼むよ。」

コロモンの瞳からはポタポタと大きな滴がこぼれ落ちる。

「ええ、もちろんよ。」

ヒカリはコロモンに満面の笑みを返し、その周りを仲間達が囲む。

「僕達には、仲間を信じる偽りのない心・困難を乗り越える為の知恵・愛するパートナー・闇を照らす希望の光・誰にも途絶えさせる事のできない友情という名の絆があけれど、一つだけまだ足りないものがあるんだ。」

タケルが仲間達を見渡す。

「それは言うまでもなさそうだね。」

丈が遺跡へ視線を向け、ミミが丈の言葉に続ける。

「それは、誰でもなく今の私達が乗り越えていかなくはいけないもの。」

彼らにはそれが何か分かっていた。

「私達に、」

「俺達に足りないものは、」

「未来へ踏み出す為の勇氣！」

次の瞬間子供達の胸元に光が灯り始めた。

「なんだろう、体の中から力が湧いてくる。」

ヒカリが自分の胸元を見ると、光の紋章が浮かび上がっていた。他の子供達も同様に、それぞれの紋章が浮かび上がる。

「ヒカリ達の力が私達にも伝わってくる・・・。」

テイルモンや他のデジモン達の体の傷が癒えていく。

「さあ、俺達に失われた勇氣の紋章を取り戻しに行こう！」

子供達は遺跡の中にいる、太一と空の元へ向かった。

遺跡の中を進むと一つの開けたフロアに出た。すると目の前に二人の見覚えのある姿が見える。

「お兄ちゃん！空さん！」

ヒカリが二人の名を呼ぶが、その声は二人の耳へは届いていないようだ。とにかく二人の元へ急ごうと、子供達が近づいた時だった。

——パシンッ。

空の右手が太一の左の頬を強く叩いた。

「え・・・？」

ミミは驚いて足を止めた。他の子供達も目の前で起きた光景が理解できずに立ち止まる。

「いい加減にしないで！！！！」

静まり返ったフロアに空の怒鳴り声が響いた。

全てはここから

「・・・っ！この野郎、何をす・・・っっ！」

いきなり平手を食らった太一は、キツッと怯みながらも空を睨みつける。

しかし空は逆に太一の胸倉をつかみ怒りが治まらない様子だ。

「大体あんたはねえ、いつつもいつつもそうなのよ！自分勝手に何もかんでも”俺がやらなきゃ！”って全部自分一人で抱え込んで、カッコつけるんじゃないわよ！」

周りが固唾を飲んで見守る中、空は震える手に更に力を込めた。

「馬鹿じゃないの。あんた一人で世界なんか救えるわけじゃないじゃない。今までもそう、一人で闘ってきたわけじゃないでしょ？太一は確かに強いかもしれない。だけどその強さだけじゃ敵わなかった事が沢山あったじゃない！」

そう言いきると空は手の力を緩め、太一の胸倉から手を離れた。大粒の涙が視界を遮り何も見えない。

太一は黙ったまま崩れるように床に尻もちをついた。

「空！」

隙を見てヤマトを始め、仲間達が一斉に空の元へ駆け寄り、一斉に太一に視線を向けた。

視線の先には太一が大きく目を見開いて、こちらを真っ直ぐに見ているのが覗える。

(空が泣いてる。皆がこっちを見ている。誰の為に・・・？何の為に・・・？)

どうやら太一はまだ気が動転しているらしい。仲間たちを見渡そうとしているが、その目元は落ち着かず、常に泳いでいる。しばらくの間を置き、ヤマトと目が合った。

(・・・ああ、そうか。)

深く息を吸い込み、太一はクスリと笑った。そして何かを悟ったかのように口を開く。

「ヤマト、俺を一発殴れ。」

そう言われ、ヤマトは躊躇せずに頷いた。

「ヤマトさんやめて!」

居てもたつてもいられなくなったヒカリが止めに入ろうとすると、タケル、光子郎、丈が腕を伸ばしヒカリを制止する。

「何故誰も止めに行かないの!？」

このままでは自体が悪化するだけだと彼らに訴えるが、誰もヤマトを止めに行く気配がない。

それどころか、まるでこの結末を望んでいたかのように見える。

「良いんだ、アレで。」

おどおどするヒカリを見て、落ち着いた様子でタケルが答えた。不安そうに見上げるヒカリの肩をたたき、優しく微笑む。

その間にもヤマトはドンドン太一に近づき、床に座り込んだままの太一に向かって大きく拳を振り上げた。ヒカリは堪らず顔を手で覆い、目を瞑った。

——ドゴッ！！

鈍い音が聞こえ、辺りは静まり返る。殴られた太一は黙ったまま反撃をする様子はない。

「相変わらず鈍い奴だな、お前は。」

ヤマトが小さくため息をついて、太一に手を差し出す。

「わりい、サンキュ。」

太一は反撃をするどころか、差し出された手をしっかり握りしめた。

「なあ。こんな事、前にもあったよな。」

「ああ、あの時もお前は一人でずっと俺たちを守ろうとしてたよ。すぐに周りが見えなくなる、お前の悪い癖だ。」

「だからヤマトがいてくれるんだろ？」

”ニシシッ”と笑いながら太一は軽快に起き上がった。

「太一お前なあ・・・俺はお前の保護者じゃねえんだぞ。」

あまりにもあっけらかんとしている彼の姿を前にして、ヤマトはあきれ返りそれ以上の言葉をかけなかった。きっとそれは太一なりの、精一杯の気づかいだったのかもしれない。

「お兄ちゃん！」

仲間達の元へ歩みを寄せる二人に、ヒカリが一目散に駆け寄った。

「ヒカリ、皆・・・本当にゴメン。俺、どうかしてた。大切な仲間を裏切ったのは俺の方だったんだな。なんて詫びたらいいか・・・」

仲間達一人一人の顔を確認めながら、太一は全員に謝る。その表情は明るいとは言えないもので、声もどんどん小さくなっていく。

「そんな顔らしくないですよ、太一さん。おかえりなさい。やっとこれで全員揃いましたね。」

光子郎が太一に声をかける。今太一が置かれている立場を冷静に判断し、自分達が彼の事を決して憎んではないという気持ちを、その一声に込めた。

「・・・ただいま。」

光子郎の言葉の意味を汲み取ったのか、太一は優しく微笑みを返した。

「だーい、ぢーい!!!」

「あ！コロモン待って！」

その空気を一変するかのように、大声を上げてミミの腕からコロモンが飛び出し、涙や鼻水で顔をグシャグシャにさせながらこちらへ猛突進してくる。

「コロモン！・・・うあ、ちょっと待て！お前その顔で近づく・・・っっ！！」

太一がコロモンの様子に気づいた時にはもう遅かった。コロモンは太一の顔面目がけて飛びつき貼りつく。

「太一、太一い。」

耳で太一の頭の周りを包み込み、顔から貼りついて離れないコロモン。

「うう・・・。」

太一からうめき声が聞こえる。しかし、嫌がる声とは裏腹に、太一はコロモンの体をしっかりと抱き締めていた。ヒカリはそんな二人の姿を見て、ふと何かを思い出したかのように呟く。

「友達のしるし・・・。」

そう、それは太一、ヒカリ、コロモンの三人にとっては特別なものだった。ヒカリの遠い昔の彼方にある記憶。今の自分達の原点がその一言に全て詰まっている。全てはそこから始まったのだ。

「太一、友達のしるしだよ。」

コロモンが何度そう言っても太一からの返事がない。

「お兄ちゃん？」

ヒカリが太一の顔を覗き込むと、彼の頬を伝うキラキラと輝く何かが見えた。

「ああ、わかってる。ハッキリ聞こえてるよ。」

「そう、聞こえてたのなら良いの。」

それが太一の物だったのか、コロモンの物だったのかはわからないが、ヒカリはそれ以上何も言わなかった。
すると隅の方から丈の声が聞こえる。

「ほら、空君。行っておいでよ。」

「良いの、丈先輩。私は大丈夫だから。」

声のする方へ視線を向けると、そこには自分を引く丈の手を払おうとする空の姿があった。

それを見た太一はコロモンをヒカリに手渡し、空の元へ一歩ずつ歩みを寄せる。

「今日だけだからな。」

自分の横を通り過ぎる太一を見て、すれ違いざまにヤマトが言う。
チラリと太一がこちらを見たような気がしたが、敢えて目を合わす

ような事はしない。

「空。」

空の前には、今までとは違う昔からよく知っている優しい表情の太一が立っていた。

「な、なによ。」

空は恥ずかしさから太一を直視できずにいた。無理もない、ついさつき怒り心頭で彼の胸倉を掴んだばかりか、ビンタまでしてしまっただから。

「俺なんかの為に泣いてくれたんだよな。ごめんな。本当にありがとう。」

そう言うと、空の手を引き自分の元へ抱き寄せた。空も抵抗することなく、太一に身を寄せる。

「太一の馬鹿。本当に本当に心配したんだから。」

空は太一の胸に顔を埋め、周りを気にすることなく大きな声で泣きじゃくった。

「ああ、俺本当に大馬鹿野郎だよな。お前にも、皆にもこんな思いさせて。空が居なかったら俺、ここにいなかったのかもしれないな。」

太一は泣き続ける空の頭を優しく撫でると、そっと自分から引き離した。つかの間の再会を喜ぶ時間は終わりを迎え、少し名残惜しそ

うに空の体から太一の手が離れる。

「あ……。」

空の口から思わず声が漏れる。

「俺、もう一人待ってるやつがいるから行かなくちゃ。きっとそいつも苦しんでるはずだから。」

寂しそうに見つめる空に、太一は子供をあやす様に言い聞かせる。空は一瞬誰なのか考えたが、答えが出るまでにそう時間はかからなかった。

「うん、きっと彼も助けを求めていると思うわ。早く行ってあげて。」

空は寂しさが彼に伝わらないようにと、満面の笑みを太一に返し気丈に振る舞う。

「太一さんがそう言うんだから、もうその彼も私達の仲間も同然よね！」

「すかさず”ね！”とミミが周りに声をかけると、他の仲間達も頷いた。」

「お前には俺達がついてる。そのかわり、絶対にここに帰ってこいよ。待ってるから。」

ヤマトが太一の肩を叩く。

「おう、必ず帰ってくるよ。」

太一はそう言うとき、ヤマトに拳を突き出した。

「約束だ。」

ヤマトも拳を前に突き出し、二人はガツチリと拳を合わせた。すると拳と拳の間から光が溢れ、勇気と友情の紋章が現れた。他の仲間達の胸元にも紋章が光り輝き、太一目がけて一直線に伸びる。

「皆……。」

太一の手の中にはそれぞれの紋章から放たれた光が集まり、虹色に輝く。

「俺達にできるのはここまでだ。後は自分自身との闘いだぞ。」

そう言ってヤマトが太一の背中を押すと、それまで太一の手の中で輝いていた光が太一を包み込み、彼は光に吸い込まれていく。彼は一体どこへ向かうのか。光の中へ消えゆく彼を見守る子供達には、それがハッキリとわかっていた。

光の中へ

”ここは——っ！”

太一が光に導かれるようにたどり着いた場所は、見覚えのあるお台場海浜公園の中心だった。周りをキョロキョロと見渡すが、異様な空気が漂い、自分以外の人間は誰も居ない。少し先には、空のゴンドラをぶら下げた観覧車が、不気味にゆっくり回っているのが見える。

「おおーい！誰か居ないのかー！？」

声を出せどもすぐに波の音に掻き消される。

「何だ、また除け者にでもされたのか？」

太一が声に驚いて後に振り返ると、薄ら笑いを浮かべるもう一人の自分が立っている。そう、アポカリモンだ。

「おいおい、そんな怖い顔するなよ兄弟。男前な顔が台無しだぜ？俺とお前は、同じ痛みを分かち合った中じゃないか。どうだ？俺と手を組む気にでもなったのか？」

嘲笑うようにして差し出されたその手を、太一は払いのける。

「ふん、可愛げのない奴め。これが最後のチャンスだったのに、残念だったな。交渉決裂だ。」

アポカリモンは両手を目の前にかざし、黒い波動のような物を太一

の胸に目掛けて放った。

「うわああああ！」

大きな衝撃波が太一の体に何度も打ち込まれる。

「アハハハハ！どうだ痛いか？苦しいか？」

アポカリモンは、けたたましく笑い声を上げながら、太一への攻撃を続けた。

「どうした？もう終わりか？」

次々に衝撃波が打ち込まれるが、太一はその度に何度も起き上がり、よろめきながらも強い眼光でアポカリモンを睨みつける。

「お前もしぶといねえ。俺、そういうのが一番嫌いなんだよ。弱い癖に。お前見てるとイライラする。」

そう言うと、アポカリモンは太一の元へ近づき、ぐったりしている体を蹴り上げる。

太一の体は宙を舞い、地面へ叩きつけられ、息も絶え絶えの状態になっていた。

「俺も鬼じゃないんだ。命くらいはくれてやるさ。ほら、言えよ」
僕が間違っていました、ごめんなさい。助けてください。” ってな。

「

アポカリモンがうな垂れる太一の頭を鷲掴みにして、グッと自分の顔を寄せ、太一に命乞いをしろと催促した。それが彼にとって一番

の屈辱であり、苦痛である事を知っていたからだ。

「お、俺は死ぬ事なんて怖くない。」

太一は霞む目を懸命に見開いて答えるが、体は傷だらけになり、反撃する力が残されているとは到底思えるような状態ではない。

「お前のそういうところがムカつくんだよ！本当は死にたくないんだろ！？怖いんだろ！？自慢の仲間に助けを呼んでしろよ！」

アポカリモンの声が太一の体中の響き、ジンジンと傷口が染みるのが分かる。

「あいつらは、ここへはやって来ない。」

顔を下に向けたまま答える太一。その姿を見て、アポカリモンは更にヒートアップする。

「アッハッハッ！これは傑作だ！仲間もパートナーも、皆お前を見捨てて逃げたってわけか？」

「そうじゃない。」と一言答える太一の声を、アポカリモンが遮る。

「何が違うんだ？お前は仲間に裏切られたんだ。お前ら人間が言う”友情”や”愛情”なんてものは、所詮幻想にしか過ぎない。お前の信じる”お仲間”の皆さんも、結局は自分が可愛くて逃げたんだよ！」

「あいつらはそんな事は絶対にしない。俺を帰りを信じて待ってるんだ。」

太一のその言葉に、アポカリモンは眉をひそめた。

「ハッ、結局そういう事かよ。お前達は俺を、この世のマイナスにしかない俺という存在を、またいつかの時の様に排除しに来たってわけか。」

太一は顔をしかめる。

「お前達人間はいつだってそうさ。自分達の都合で、いとも簡単に俺を見捨てる。人間から生まれた不要な感情、良質のデータの成長を阻むバグという存在、自分達に邪魔な物は全て”悪”と呼び排除する。俺にとっちゃお前らの正義の方が、よっぽど邪悪で理不尽な存在だ。」

アポカリモンはついさっきの状態とは打って変わって冷静に、そして冷酷な表情で太一を見透かしたように睨みつけた。

「そしてお前は俺を倒し、またヒーローとして賛美の嵐へ飛び込むってわけだ。お前らが甘い蜜を吸う為に、俺は再び冷たく、貧しい決して光の届かない、深い深い暗闇へ葬り去られるのさ。わかるか？お前にこの孤独の世界の恐ろしさが。」

そう言うと、アポカリモンは自分の左胸を右手の親指で指差した。

「さあ、やれよ。俺の左胸を一突きすれば、俺はまたお前の目の前から姿を消す。邪魔者はここでおさらばだ。だがな、これで終わりだとは思うな。また俺はすぐにお前たちの中に生まれつくぞ。」

確かに、隙だらけの今ならアポカリモンを倒すことが出来る。しか

し太一は首を縦に振ることはなかった。

「俺は、お前を倒しにきたわけじゃない。」

「何わけのわかんねえ事言っただお前？」

見当違いな彼の反応に、アポカリモンは首を傾げた。

「俺はお前に謝らなきゃいけないんだ。あの日の事や、今のこの世界の惨状の事を。」

（あの日俺達は過ちを犯した――・・・。
本当に倒すべきはアポカリモンじゃなく、自分達の身勝手に利己的な心だったんだ。）

「やめろ、俺はそんなものに騙されないぞ。」

元々アポカリモンは、太一の心の闇から生まれた存在であるが為に、彼の心の内が手に取るように読めてしまい、明らかに動揺を隠せずにいた。

「未熟な俺達が、本当の友情や愛情の意味に気づく事が出来たのはアポカリモン、全部お前のおかげだ。」

太一はよろめきながらも立ち上がり、アポカリモンに徐々に近づく。

「来るな・・・来るな来るなっ！そんな目で俺を見るな！やめろおおお！」

近づいてくる太一に衝撃波を当てようとするが、手の奮えが止まら

ず、太一の横をことごとくすり抜けていく。

「もうお前は一人じゃない。暗闇で一人孤独と闘う必要はないんだ。」

二人の距離が、まるで今までの時間を埋めるかのように、少しずつ少しずつ縮まる。

そしてアポカリモンの前に太一が立った時、二人を虹色のまばゆい光りが包んだ。

「見ろよ、これは俺達の心に宿る光だ。」

二人を包む光をよく見ると、一つ一つの色が異なり蝶の形をしている。

「いいか……。」

太一が小さく呟き、右手を光に向けて突き出すと、明るい光の中から黒い一羽の蝶が指先に舞い降りてきた。

「光ってのは明るい色だけとは限らない。この黒色も、光りの中の一つ。」

黒い蝶は太一の指先を離れ、ヒラヒラと舞いながらアポカリモンの指先に止まる。

「馬鹿な……。これも光だと言うのか？」

「ああ、そうさ。俺とお前が今まで闇だと思っていた黒色の世界は、ちゃんと光に照らされていたんだ。」

アポカリモンは指先に止まった蝶を、撫でる様に人差し指でなぞる。

「光の無いところに闇は存在しない。良く思い出してみろよ？ お前あの暗闇の中でも、自分の影が見えなかったか？」

太一の問いかけに、アポカリモンはハッとした。

「そういえば、俺には常に影があった。あの暗闇の世界にも光が射してただなんて……。俺が暗闇だと思っていた世界は、お前たちと同じ場所にあったのに、それに気づかなかったただけって事か。」

何かを悟ったのか、深呼吸したアポカリモンは目を瞑り、太一に心の内を話し始めた。

「太一、俺はお前達が羨ましかったよ。信頼できる仲間たちと一緒に旅をして、共に成長していく姿が、俺にはとてもまぶしく見えた。」

今までとは一転して寂しげに話す表情に、太一は思わず目を逸らす。

「俺はお前達の恐怖や孤独、貧しく冷え切った心に生まれた存在。誰もが俺の存在を知りつつも、受け入れようとしてくれなかった。皆、俺という存在に触れたくないが為に、忘れることに必死だったんだ。一方外では、人々やデジモン達が手を取り合い、互いに必要な存在として認めていた。その現実を突きつけられた時、俺は俺の存在意義を真っ向から否定されたような気がしたよ。」

アポカリモンが話す一言一言は、太一の胸に深く突き刺さり痛みを増していく。それは攻撃による傷の痛みではなく、心の奥底からく

るものだった。

「俺は気づいて欲しかった。人間にも、デジモンにも俺という闇は必ず存在し得ることを。そして、お前達が”要らない”という俺にも、生まれてきた意味があるということ。目を逸らさずに、もつと向き合って欲しかったんだ。」

閉じていた瞼を上げると、太一が沈痛な面持ちで立ちすくんでいるのが見える。

「何てツラしてんだお前。その顔をするべきなのは俺の方だろうが。」

アポカリモンが太一と視線を交える。

「俺、今まで勇気の紋章の持ち主だとか言ってたけど、全然違ってた。がむしゃらに前に進む事が勇気だと思ってた。お前（自分自身）と向き合う勇気なんて、これっぽっちも持ち合わせていなかった事に、今になってわかったよ。」

太一がまだ言い終えないうちに、アポカリモンが言葉を重ねる。

「なあ、覚えているか？昔、ヒカリが大熱を出して倒れた日の事を。」

太一は驚いた。それもそのはずだ、あれ忘れもしない――。

それは、太一がデジタルワールドへ向かう3年前の出来事だった。風邪で熱を出していたヒカリを無理やり遊びへ連れ出し、危うく命を落としそうになったことがある。

母さんは慌ててヒカリを病院へ連れて行き一命を取りとめたが、太一は両親に酷く叱責された。

そして、両親が自分の事を嫌いになってしまったのではないかと、不安と孤独に小さな体を震わせた。

「何故それを・・・。」

慌てる太一の様子を見て、アポカリモンはクスリと笑って答えた。

「何故って？そんなの愚問だろう。俺はお前が孤独や不安や恐怖を感じた時に生まれた存在だ。つまり俺は、あの時から既にお前の中に居たんだよ。」

先ほどまで指先にいた黒蝶がアポカリモンの周りをグルグルと旋回し始め、やがて胸元に止まった。

「さっきお前が言った”自分自身と向き合う勇気”がどこにあるのか、その目ん玉しっかり開けてよく見ておけよ。」

そう言うと、黒蝶はアポカリモンの胸に溶け込む様に吸い込まれた。そして間もなく、見たことのある紋章が黒く浮き上がってきた。

「何で勇気の紋章がここに！？」

太一の目の前には、黒く光る勇気の紋章を手にするアポカリモンの姿があった。混乱する太一を余所に、彼はシレッと答える。

「お前がこれを持ち合わせていなくて当然だ。これは、俺の紋章”自分と向き合う為の勇気”だ。」

紋章を指差しながらパクパクと口を開け閉めする太一を見て、アポカリモンは呆れ顔で話しを進める。

「あのなあ、そのマヌケな顔どうにかなんねえのか？俺まで同類だと思われるだろ。俺もビックリしたよ。まさか勇気の紋章が二種類もあるだなんて、思いしなかった。」

「信じられない。そんなの今まで聞いた事もないぞ。」

太一は半信半疑で耳を傾ける。

「まあ、それもそのはずだ。これはその時が来るまで、自ら気配を消していたんだ。」

「その時？」

「ああ、今日がその時だって事だよ。お前と俺が互いにその存在を認め、二つに分かれていた紋章が一つになる時が来たんだ。」

そのまま”手を出せ”と促され、太一は両方の手のひらをアポカリモンへ向かって見せるように突き出した。

「こ、こうか？」

突き出されたその手のひらに、合わせるようにしてアポカリモンが手を重ねる。

——おかしい。手のひらに重なったはずの、もう一つの手のひらの感触がない。

「え？お、お前・・・手が。」

太一の手の向こう側で、光の粒子に分解されていくアポカリモンの手があった。手だけじゃない、体全体が分解されていこうとしている。

「お前に言われなくても見りゃわかる。俺はここまでだ。」

アポカリモンは次々に分解されていく自分の体を見ながら、目を細め穏やかな表情を浮かべ、焦る太一とは正反対にやけに落ち着きを見せ、徐々に間を詰める。

「ここまでって、嘘だろ！？おい！聞いてんのかよ！」

「いちいちうるせえな。少しの間くらい黙ってられないのかよ。」

微かにチツと舌打ちが聞こえた。

「黙ってられるかよ！やっとなり合えたのに、もうサヨナラなんてあんまりだ！」

太一は消滅を食い止めようと腕を引き離そうとするが、どういうわけか腕はピクリとも動かない。額からはダラダラと汗が流れ、無情にも時間だけが過ぎてゆく。

「人を勝手に殺すな。俺は死なねえし、どこにも行かない。さっきも話したと思うが、頭の悪いお前の為にもう一度だけ説明してやるから良く聞け。」

アポカリモンの体は既に半分以上消失していた。

「俺達は元々一人の人間、”八神太一”として生まれたが、ある日二つに分かれた事から互いの存在を認める事が出来ずに今日までやってきた。」

太一がゴクリと息を飲む。

「だが今、再び元の一つの体に戻る時が来たんだ。俺はお前の体の中で生き続ける。たったそれだけの事だ。」

「そんな・・・。」

どうする事もできない自分をこんなにも恨んだ事はなかった。これが現実だというのか？共に歩む事すら許されないのか？

「おい、そんな顔してたら俺までどうしていいか分からなくなっちまうだろ。こういう時は笑顔で見送るもんだぜ”兄弟”。」

涙で遮られた視界の先には、もうほとんど形を残していない光の集まりがぼやけて見えた。

「それじゃまたな。」

それが最期に聞いた彼の言葉だった。光りの粒子が波のように太一の体に当たり弾け飛ぶ。

「~~~~っ!!」

たった一人残された少年は、声にならない声で涙が枯れるまで泣き続けた。

手の中に残された赤と黒の紋章を握りしめたまま。

土砂降りの雨のように降り注ぐ光の粒子達と、ヒラヒラと舞い続ける蝶と共にずっとずっと・・・。

おはよう

僕は長い事一人ぼっちだった。

たった一筋の光さえ許されない世界で、いつもいつもこう言い聞かせたんだ。

「大丈夫、僕は強いから一人でもきつと大丈夫。」

この世界には誰もいない。僕だけだった。

ある日、僕にそっくりの男に出会った。

彼は僕とは正反対で、太陽のような笑顔を振りまいてとても眩しかった。

「ねえ、君は何でいつも笑っているの？」

僕は勇気を振り絞って君に聞いてみたんだ。そしたら君はこう答えたよ。

「何で？それは君が僕の寂しさも怖さも全部背負ってくれてるからじゃないか。」

君はこんな恐ろしい言葉も笑顔で口にするんだ。

「だからね、僕はそんな事気にする必要がないんだよ。怖い思いも、寂しい気持ちもぜーんぶ君が抱えてくれる。」

ああ、そうだった。君がそうして僕に嫌な事を全部任せるから、笑っているんだね。

君がそんな事を言うもんだから、いつの間にか変な口癖を覚えてし

まったよ。

「もっと強くなれば、きっと誰も僕に怖い思いをさせない。強ければ仲間だって増えて、僕はもう一人ぼっちじゃなくなる。」

もっともっと強くなれば、皆僕の事仲間外れにしないよね？

僕より強い人がいなくなれば、怖い思いしなくても良いんだよね？皆強い人が大好きなんだよね？

あれ？おかしいな……。こんなに強くなったのに、皆僕の周りからいなくなっちゃった。

「どうして？」

わからないよ、何で皆いなくなっちゃったのかな。僕こんなに強くなったのに。

でも僕より弱いはずの君は相変わらずで、友達がたくさんいるんだね。

「どうしたの？」

何で君は僕の事をそんな目で見ているの？僕が何をしたの？

ねえ、何で皆して僕の事を邪魔者扱いするの？

僕は要らない子だったの？ねえ、教えてよ。悪い事をしたのは誰？

「——君が僕をこんな醜い姿にしたんじゃないか。」

・

・ ・ ・
「うわあああ！」

思わず叫び声を上げると、そこには見覚えのある天井が見えた。

「あ、あれ？ここ、どこだ？」

何だったんだ今のはと考えながら、額に滲む汗を拭い辺りを見渡す。
窓から吹き込む朝の涼しい風、ヒラヒラと靡くカーテン。
パリッと糊がしっかりかけられたYシャツに、机の上には・・・

「夏希、優佑。」

愛する家族と一緒に撮った写真を手に取った瞬間、自然と二人の名前がこぼれた。

どうやら俺は現実世界に戻ってきたらしい。

「父さんどうしたの？何か凄い声が聞こえたけど。」

まさかこの声は

「優佑！おお、げ、元気してたか！？」

久しぶりに再会した息子の肩に手を置き、体をゆさゆさと揺する。

「あわわわ、どうしたのさ父さん！」

優佑はパチパチと瞬きをしながら、俺の方を不思議そうに見ている。

「いやあ、何だか久しぶりに会うもんだから興奮しちまってな！アハハ！」

俺は手に残る優佑の感覚をしっかりと噛みしめた。

「父さん何言ってるんだよ。昨日も会ったじゃないか。」

「え・・・？」

おいおいおい、嘘だろ？だって俺は今までデジタルワールドに居て、この家を何日もするにしたはずだぞ。

そうだ！カレンダー！カレンダーを見ればすぐにわかるはずだよな。

「7月25日・・・。」

「そうだよ、今日は7月25日。下で母さんが早く起きろー！ってこんな怖い顔して下で待ってるよ。」

優佑は両目を釣り上げて夏希の怒った顔の真似をして見せてから、階段を駆け下りて行った。

「何故だ。何故あの日から一日も時が進んでいないんだ。」

頭の中を今までの出来事がグルグルと回る。夢だったのか？いや、夢にしちゃ出来過ぎだ。何が起きてる？どうしたんだ俺。

「疲れてんのかな・・・。」

フウッと息を吐き、ベッドから降りる。

——チャリン。

ベッドから何か落ちた音がした。

「何か落ちたか。」

パジャマの中に小銭でも入ってたか？俺、よく寝巻姿でコンビニと
か行っちゃうし。あんな姿、会社の人に見られたら結構恥ずかしい
だろうなあ。そんな事を考えながらベッドの下を覗き込む。

「マジかよ。」

覗き込んだ先には、赤と黒のキーホルダーの様なものがあつた。そ
う、まぎれもない勇気の紋章だ。

「夢じゃなかったのか。」

二つの紋章を拾い上げ、まじまじと眺める。

やっぱり夢なんかじゃなかったんだ。もう一人の俺は存在した。そ
して、今も心こころに居るんだ。

太一はそつと左胸に手を当てて深呼吸をした。

「大丈夫、お前はもう強くなくても良い。俺が居る、皆がいる、だ
からもうあんな顔しないでくれ。お前は俺にとって大切な存在なん
だ、望まれて生まれてきたんだよ。」

俺は黒い紋章に向かって、精一杯の笑顔を作った。あの時、きちん
と笑顔で見送ってやれなかったから、せめて今だけでも笑ってやら

ないとな。

（ああ、俺はもう一人じゃない。これからも頼むぜ兄弟。）

気のせいだったのかもしれないが、そんな声がどこからともなく聞こえたような気がした。

「父さん？急がないと会社遅刻するよって母さんが……。」

俺があまりにも食卓へ行くのが遅いから、優佑が再び呼びに来ていた。そんなに心配するな、ちゃんと間に合うって。

そんな余裕の表情を見せる俺を余所に、優佑はそわそわと心配そうに俺の後について回る。原因は一つ、朝から夏希の雷が落ちるところを見たくないからだ。

「太一いゝ、まだなの？僕もう準備出来てるよ。」

洗面所で顔を洗っていると、横からアグモンが覗き込んできた。どうやらアグモンも何も覚えていないらしい。

「すまないアグモン。急いで支度するよ。」

ヒラヒラとアグモンに手を適当に振り返す。

「もゝ。玄関で待ってるよ。」

アグモンはだらしのない俺に呆れて、それ以上は何も言わずにその場

を立ち去った。

「ああ、すぐ行く。」

懐かしいな。つい何日か前の出来事なのに、とても新鮮に感じる。本当に皆何も覚えていないのだろうか。それか何だ、今日はエイプリルフルか何かか？

鏡に映る39歳の親父を見ては、隅々まであの夏の自分と比べた。肌艶なんか比べ物にならないくらい良かったよな、今なんて水すら弾かないし……。年を取るってこういう事なんだよなあ。

「フフ……。」

思わず苦笑いをしてしまった。

「太一い、早く。」

しびれを切らしたアグモンの声にハツとする。時間は何時だ？

「げっ！」

もうこんな時間じゃないか。何で俺っていつもこうも要領悪いかな。太一はバタバタと階段を駆け降りて玄関へ向かう。久しぶりの朝ごはんを食べる事は叶わなそうだ。

靴を履いていると、優佑がニコニコしながら近づいてきた。そういえば今って夏休みなんだっけ？

「ねえ、父さん。あと一週間で8月1日だよ。楽しみだね！」

優佑の表情からして、どうやら夏希の雷は回避できたようだ。

そっか、優佑はあの日の事をずっと楽しみにしてたよな。でもお前、宿題が全然進んでない事忘れてないだろうな？

「ああ、そうだな。でも優佑、ちゃんとして夏休みの宿題しないと連れていけないからな。」

俺は懐かしみながら、優佑の髪をクシャツと撫でた。

「ええー・・・。」

親として我が子に期待をしたが、優佑はバツの悪い顔を見てそれは皆無だったと確信した。未だに宿題に手をつけていない事が、ハツキリとうかがえたのだ。

「ほーら、お父さんはお仕事行くんだからここまでよ。帰ってきたらまたお話しましょ。」

久しぶりに耳にする優しい声。優佑の斜め後ろに目を向けると、優しく微笑む夏希の姿があった。

（あれ？夏希さん、ちょっと怒ってらっしゃる？き、気のせいかな？）

妙に優しい笑顔を振りまく夏希を見て、背筋が凍るような気がした。明日こそは、愛妻が丹精込めて作ってくれた朝ごはんをいただかないと・・・。

「それじゃ、行ってきます。」

「行ってらっしゃい！」

二人に見送られてアグモンと家を出た。

外に出ると、朝だというのにジリジリと夏の陽射しが迫っていた。今日は会議だから、ネクタイと上着の着用も必須なんだよな。世間はクールビズ！エコ推進！って言ってるくせに、うちの会社はお構いなしですか。

「あ、太一！あれを見て！」

いきなりアグモンが大きな声をあげた。

「んー、なんだアグモンいきなり大きな声を出すなよ。どこだ？」

あそこ！とアグモンが指差す先を見て驚いた。

「なん・・・なんだあれは。」

視線の先には様々な色をした蝶の大群が舞い、光りに反射してキラキラと輝いていた。

赤・青・黄・緑・・・それに黒も。

「・・・綺麗だ。」

なんて綺麗なんだ。夏の空が一転、一面虹色に染まる。まるで何かの柵から解き放たれたかのように、蝶は思い思いに空を

舞っていた。

「随分とご機嫌じゃないか。」

太一が一言そう呟く。

俺は自分の居る世界に絶望を覚えた。

地位や権力を争う大人達、その背中を見て育つ夢も希望も持てない子供達。

こんな世界間違っていると思った。

だけど、それは自分が現実から逃げる為の口実にしか過ぎなかった。本当は誰もが夢や希望を抱き、それに向かって全力で駆け抜けた時代があった。

大人の俺達は、そんな小さな時の気持ちをどこかに置いてきてしまったんだ。

大人になればなるほど、一途な思いだけでは通用しない事が増えた。綺麗事だと言われる事が多くなった。

いつか夢見たあの時の俺が、どんどん記憶の彼方に置き去りにされた。

夢から覚めると、俺には何もなかった。

あんなに心から願っていた世界は、どこか遠くへ儚く散っていく。

何度も何度も立ち止まる。

その度に、未来へと羽ばたく為の翼が一つ、また一つ折れていった。

こんなボロボロの翼じゃ空を舞う事も、風を切る事もできない。

でも周りを見ればほら、俺と同じように傷を負った翼を持つ人は沢山いたんだ。

そうだ！一人じゃ飛ぶ事は出来なくても、皆の翼を一つにすればどんな大空も自由に飛びまわれるんじゃないか。
それも俺一人じゃない皆で一緒に。

「アハハ、そうだったのか。」

太一は目を細めて笑った。

「どうしたの太一？」

急に笑い出した太一を見て、アグモンが不思議そうに顔を覗き込ん
でくる。

「なんでもないよ。」

そう言って俺はアグモンの頭を撫でた。アグモンは気持ち良さそう
に目を瞑って、俺の手に頭を擦り寄せた。

折れて自分の背中から落ちた翼の片割れは、まだ痛みもなにも知ら
ない綺麗な翼なんだ。

何色にも染まっていない、真っ白な翼を拾い上げて次の希望の光・

・そう、子供達に託すのが俺にできる世界を救う方法だったのかも
しれない。

翼をむしり取るんじゃなく、大空を舞う為の力を少しだけ分けてあ
げる。

そして子供達はその白い翼に、一人一人自由に光りを纏わせて羽ば
たいていく。

俺が世界を作るんじゃなく、次世代の子供達が自分自身で作ら上げ
ていくものだったんだ。

「君は怖くないの？」

その声に振り返ると、幼き日の自分がこちらを見ていた。

「もう怖くなんかないさ。俺にはアグモン（こいつ）がいて、皆がいる。」

「そう・・・、なら良かった。」

俺が笑顔を返すと、小さな俺は少し寂しそうに笑い姿を消した。

「わ、やばい！こんな時間だ！おい、アグモン急ぐぞ！」

時計に目をやると遅刻寸前の時間。太一は蝶に氣を取られているアグモンの手を取り、駅までの道を風を切るように駆け抜けた。

自分が存在する意味なんて本当は良く分からない。

俺がいなくても世界はきつと回っていくだろう。

だけど俺の勇気が少しでも、皆が未来へ踏み出す一步の力になれば良い、そんな事を少し思った。

ヒーローみたいにカッコイイ事は出来ないかもしれないけどな。

——だから今、ぼくはここにいる。

おはよう（後書き）

太一青年と仲間たちのお話はこれで終わりです。
皆さん、ここまで読んでくださってありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3694p/>

失われた勇気の紋章

2011年5月6日13時30分発行